

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ

平成元年3月

島根県匹見町教育委員会

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ

平成元年3月

島根県匹見町教育委員会

序 文

本書は、匹見町内における埋蔵文化財分布調査第2年次の調査報告書であります。第1年次調査報告を行う中で、それらの発掘の状況から判断して、県営圃場整備事業計画内に散在する埋蔵文化財の範囲は相当広範囲であり、密度の高いものであるとの考えから、大字紙祖地域全体に11地点32坑、面積にして128m²の調査を昭和63年4月から平成元年3月までに国庫補助事業を導入する中で実施したものである。

この調査に先立ち、島根県教育庁文化課、島根大学法文学部教授田中義昭氏の指導助言を受けると共に、教育委員会における調査体制と専門員の専属配置を行い事業実施したものである。初年度に比べ不備ながらも調査に従事する各位の手順も慣れ、当初の思惑よりか早く調査結果のまとめが出来たことは、指導助言の適切とあいまって幸であったと感謝するものである。

調査結果として、前田遺跡調査報告書で報告される縄文後晩期の縄文土器、石器をはじめ、古墳から奈良時代に至る多量の上師器を検出した。岡本地区の善正町、前田尻等からも前記石器、土器等各々多数を発掘している。中でも石ヶ坪遺跡では東北九州との交流を喚起させる阿高式土器が確認された。このような貴重な遺物や遺跡保存等、史実を後世に伝えるため、本調査報告書を作成発刊するものである、と共に考古学上に関係者の参考となればより幸せと思うものである。

同時に発刊する『前田遺跡調査報告書』本格調査に係る詳細報告書と併せ調査の実施にあたり御協力頂いた島根大学法文学部田中義昭教授を始め島根大学学生赤坂二史氏、土地所有者の方々並びに発掘作業に従事された作業員の方々に深甚なる謝意を表すものであります。事業は第3次以後へと継続し全容の解明に努力する所存でありますので関係各位の御援助御協力をお願い申し上げ発刊の言葉にいたします。

平成元年3月

匹見町教育委員会

教育長 平 谷 勉

例　　言

1. 本書は昭和63年度国庫補助事業として、匹見町教育委員会が行なった町内遺跡詳細分布調査の報告書である。
2. 調査は島根大学歴史学教室及び島根県教育委員会文化課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

| | | |
|-------|---|----------------------------------|
| 調査指導 | 島根大学法文学部教授 島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第1係長 島根県教育委員会文化課文化財保護主事 島根県教育委員会文化課上事 | 山中 義昭 宮沢 明久 松本 岩雄 鳥谷 芳雄 |
| 事務局 | 匹見町教育委員会教育長 匹見町教育委員会教育次長 匹見町教育委員会派遣社会教育主事 | 平谷 勉 渡辺 隆 田原 敏明 |
| 調査担当者 | 匹見町教育委員会文化財保護専門員 | 渡辺友千代 |
| 調査補助員 | 赤坂二史 | |
| 調査参加者 | 山崎貞市、栗田 定、栗田 修、森脇雅夫、久保田博方、中村康子、石原八重子、坂原加津子 | |

3. 発掘調査に際しては、土地所有者をはじめ地元の方々に終始多大な協力をいただいた。また、遺物整理にあたっては、島根県教育委員会文化課の松本岩雄・鳥谷芳雄氏らの御指導を得、森清、森節子氏らの手を煩わし、石器の石材鑑定は田中幾太郎氏の協力をいただいた。ここに感謝の意を表したい。
4. 今回の調査では、上坑状遺構-SK、溝状遺構-SD、柱穴状遺構-P、積石遺構-SXと略号し、調査地点名は遺物・遺構の検出有無にかかわらず、全て「○○地点」として統一した。また学数に伴って、図版においては無遺調査区では省略したものもあるので承願いたい。
5. 本書の掲載図面は、渡辺友千代・竹田早月・渡辺登美子が分担し、執筆は調査員、調査補助員、事務局が行ない（執筆者名は目次および各項末尾に記す）、編集は松本岩雄の指導のもとに渡辺友千代が行なった。

目 次

| | | |
|---------------|---------|----|
| 第1章 調査に至る経過 | (渡辺 隆) | 1 |
| 第2章 地域概観 | (渡辺友千代) | 2 |
| 1. 地理的環境 | | 2 |
| 2. 歴史的環境 | | 2 |
| 第3章 上ノ田調査地点 | (渡辺友千代) | 7 |
| 1. はじめに | | 7 |
| 2. 調査の概要 | | 7 |
| 3. 各調査区の概要 | | 8 |
| 第4章 前田調査地点 | (渡辺友千代) | 8 |
| 1. はじめに | | 8 |
| 2. 調査の概要 | | 10 |
| 3. 各調査区の概要 | | 11 |
| 4. 出土遺物 | | 11 |
| 第5章 前田道ノ下調査地点 | (渡辺友千代) | 14 |
| 1. はじめに | | 14 |
| 2. 調査区の概要 | | 14 |
| 第6章 善正町調査地点 | (赤坂 二史) | 16 |
| 1. はじめに | | 16 |
| 2. 調査の概要 | | 17 |
| 3. 各調査区の概要 | | 18 |
| 4. 出土遺物 | | 19 |
| 第7章 曾利田調査地点 | (渡辺友千代) | 21 |
| 1. はじめに | | 21 |
| 2. 調査区の概要 | | 21 |
| 第8章 前田尻調査地点 | (渡辺友千代) | 21 |
| 1. はじめに | | 21 |
| 2. 調査概要 | | 23 |
| 3. 各調査区の概要 | | 23 |

| | | |
|-----------------------|----------------|-----------|
| 4. 出土遺物 | 25 | |
| 第9章 下正ノ田調査地点 | (渡辺友千代) | 28 |
| 1. はじめに | 28 | |
| 2. 調査の概要 | 28 | |
| 3. 調査区の概要 | 28 | |
| 4. 出土遺物 | 31 | |
| 第10章 早苗口頭調査地点 | (渡辺友千代) | 33 |
| 1. はじめに | 33 | |
| 2. 調査区の概要 | 33 | |
| 3. 出土遺物 | 35 | |
| 第11章 小深上ノ切調査地点 | (渡辺友千代) | 36 |
| 1. はじめに | 36 | |
| 2. 調査区の概要 | 36 | |
| 第12章 石ヶ坪調査地点 | (渡辺友千代) | 38 |
| 1. はじめに | 38 | |
| 2. 調査の概要 | 38 | |
| 3. 調査区の概要 | 40 | |
| 4. 出土遺物 | 42 | |
| 第13章 道ワテ尻調査地点 | (渡辺友千代) | 45 |
| 1. はじめに | 45 | |
| 2. 調査の概要 | 47 | |
| 3. 調査区の概要 | 47 | |
| 4. 出土遺物 | 49 | |
| 第14章 小 結 | (渡辺友千代) | 49 |

挿 図 目 次

| | |
|------------------------|-----|
| 第1図 遺跡の位置 | 1 |
| 第2図 調査地点位置図 | 3～4 |
| 第3図 上ノ田地点配置図 | 6 |
| 第4図 上ノ田地点土層断面図 | 7 |
| 第5図 前田地点配置図 | 9 |
| 第6図 前田地点土層断面図 | 10 |
| 第7図 前田地点出土十器実測拓本図 | 12 |
| 第8図 前田地点出土石器実測図 | 12 |
| 第9図 前田道ノ下地点配置図 | 13 |
| 第10図 前田道ノ下地点土層断面図 | 14 |
| 第11図 善正町地点配置図 | 15 |
| 第12図 善正町地点土層断面図(1) | 16 |
| 第13図 善正町地点土層断面図(2) | 17 |
| 第14図 善正町地点出土十石器・須恵器・石器 | 19 |
| 第15図 曽利田地点配置図 | 20 |
| 第16図 曽利田地点土層断面図 | 21 |
| 第17図 前田尻地点配置図 | 22 |
| 第18図 前田尻地点土層断面図・平面図 | 24 |
| 第19図 前田尻地点出土上器実測拓本図 | 25 |
| 第20図 前田尻地点出土石器実測図 | 26 |
| 第21図 下正ノ田地点配置図 | 27 |
| 第22図 下正ノ田地点土層図 | 29 |
| 第23図 下正ノ田地点出土土器実測拓本図 | 30 |
| 第24図 下正ノ田地点出土土器拓本石器実測図 | 32 |
| 第25図 早苗口頭地点配置図 | 34 |
| 第26図 早苗口頭地点土層断面図 | 35 |
| 第27図 早苗口頭地点出土十器実測図 | 36 |
| 第28図 小深上ノ切地点配置図 | 37 |

第1章 調査に至る経過

匹見町では昭和62年度より紙祖地区から匹見地区へと約100haの県営圃場整備事業が始まったばかりである。前年の発掘調査及び元組の石ヶ坪遺跡、荒木の水田ノ上遺跡から匹見町の先住民の遺跡は広範囲に存在することが分かった。

昭和63年度は紙祖地域を中心に11地点の分布調査を行ない、前田地点では縄文後晩期の繩文土器や石器を検出し、昭和63年度事業として前田遺跡を本格調査した。

分布調査は島根大学 田中義昭教授、島根県教育庁文化課、赤坂二史調査補助員の指導のもと5月16日から11月11日まで132人役をかけて発掘調査した。11ヶ所の分布調査地点では岡本の善正町で上削器、須恵器を検出した。又、岡本の前田尻では縄文後晩期と思われる土器や石器を検出し、柱穴と思われる遺構を発見した。荒木の下正ノ田地点では2坑(2m×2m)から170点に及ぶ土器片、石器類を検出する。注目すべきことは、石ヶ坪遺跡で既に発見していたが、東北九州地方との交流を物語る阿高式土器が今回も発見されたということである。元組の道リテ尻では縄文後期の土器・石器・土鐘も検出された。

分布調査でこれまでの遺物が発見され、関係者一同驚いている。遺物整理、報告書作成は匹見町文化財研究所で渡部友千代文化財専門員を中心とした補助員3名を配して行なったが、膨大な遺物整理、資料整理に今年度初めて町独自に取り組んだので苦労した。圃場整備事業の進捗に大きな影響の出ないように配慮しながら匹見町の古代史の解明に行政として努力したい。又、住民にも発掘した遺物・資料を町づくりの中に生かした文化財行政をすすめたいと思います。



第1図 遺跡の位置

分布調査に關係されました皆様のご協力ご援助に深く感謝いたします。

(渡辺 隆)

第2章 地域概観

1. 地理的環境

島根県美濃郡匹見町は、中国地方の骨格をなす中国脊梁山地の両端に位置し、広島・山口の2県に接する。広島県境をなす北東—西南に走る脊梁は、1,000m～1,300mの標高をもつ山稜が並列し、また他方とも標高1,000m～700mの山稜をもってとり囲み、1つの谷盆地を形成している。

特に北東—南西に走る地質構造線（断層谷）が発達する該地域は、これに直交する線状に切り刻まれた地塊で河谷を一層複雜にしている。つまり高位置では北東—西南に沿うが中央部を中心とした低位置（標高約260m）では、北西—東南に切り込み、したがって河川もこれに従って流下する。

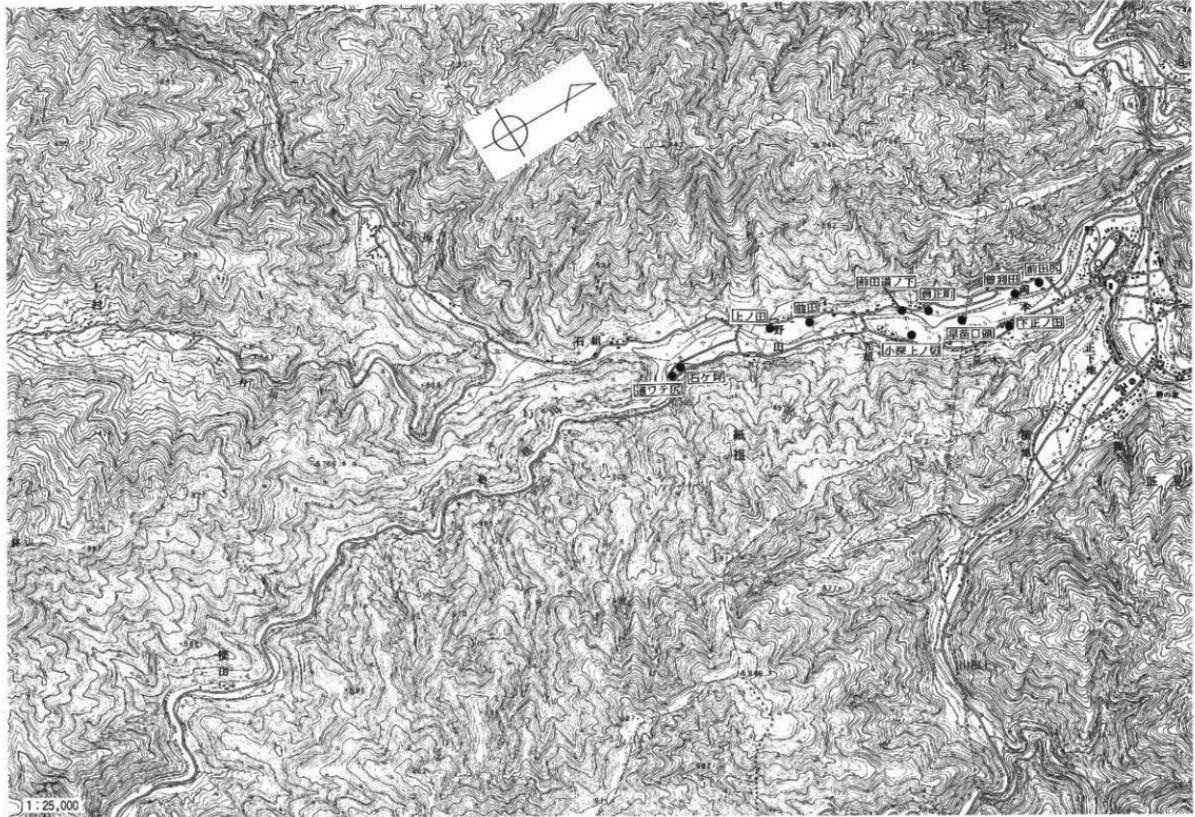
こうした断層地塊の深凹を形成する該地域では、人文活動域はもっぱら匹見川・支流域を中心とした狭小地の谷平野であった。しかし、往古は、96%の林野が重要な資源地であった。特に仙人や木師器は生活の糧を山地に求め、製炭も行なわれる一方、豊富な山林は藩制期の鉱業を盛んにさせた。またV字谷の傾斜地では楮・三桻などが焼烟農業とともに行われ、殊に今日では、温帯林を主体とした豊富な広葉樹林帶下で椎茸・山葵などの栽培が行なわれている。

今回の分布調査は、匹見中央の南西にあたる紙祖地域を中心に行なったものである。その域は、顯著な北東—南西方向に走る断層地溝帯に立地してて、その間を縫って紙祖川が狹長な河岸段丘を形成しながら北東流している。そのため両端は地舉山地が突き出るように並走しており、その山地から伏流水となり山裾で湧水し、段丘面を横切り紙祖川に流れ込んでいる。そうした立地には、1つの列村的な集落が形成されていて（荒木・元組・岡本・野田・石組などの各地区）、また水田の広がる生活域もある。

2. 歴史的環境

本地域（紙祖地域）は、地名が示す如く石見半紙発祥の地で藩制期には製紙が盛んであった。そのため、断層谷による狹長な該地では、急峻な斜面に焼畑と連鎖した楮・三桻が植えられ、ソバ、コシニャクの生産も盛んであった。また四村と称された藩制期には、益田領匹見組に属し代官所が、戦国期には匹見に割拠する土塹を統治した歴代の霸者たちが最平坦地を一望できる本地域の石組に移住していた。平安末期～鎌倉期には「匹見別府」の名で史料に散見されていることから、当地域は国衙領であったらしく、荒木地区にはその莊官である“公文給”的地名がある。

本地域の原始古代を一望すると、紙祖川と小原川との相会地に繩文中期・後期を検出した「石ヶ



第2図 調査地点位置図

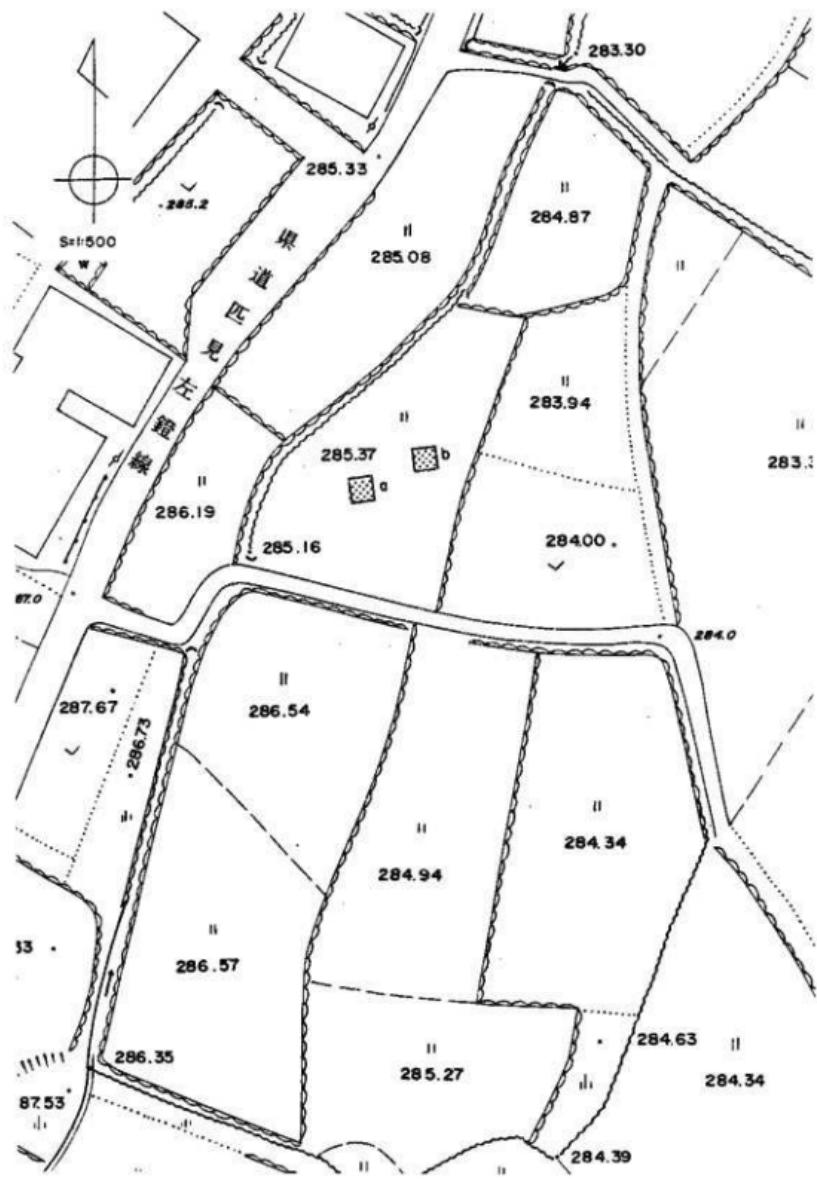
第1表 匹見の原始・古代遺跡一覧

| No. | 遺跡名 | 所在地 | 種別 | 時代等 | No. | 遺跡名 | 所在地 | 種別 | 時代等 |
|-----|--------------|-------------|-----|----------------|-----|--------|----------------|-----|-------------------|
| 1 | 新農原遺跡 | 匹見町大字道川字出合原 | 散布地 | 先器 縄文 | 17 | 前田遺跡 | 大字紙祖字野山 | 散布地 | 繩文・弥生 古墳 |
| 2 | 土家屋遺跡 | 大字道川字下道川 | 散布地 | 縄文 | 18 | 善正町遺跡 | 大字紙祖字岡本 | 散布地 | 古墳 奈良・平安 |
| 3 | 江田古墳群 | 大字匹見字江田 | 古墳群 | 横穴式石室 | 19 | 前田尻遺跡 | 大字紙祖字岡本 | 集落跡 | 縄文 |
| 4 | 江田平台遺跡 | 大字匹見字江田 | 集落跡 | 弥生 | 20 | 野人古墳 | 大字匹見字野人 | 古墳 | |
| 5 | 坂田遺跡 | 大字匹見字江田 | 散布地 | 古墳 | 21 | 神田遺跡 | 大字匹見字野人 | 散布地 | 縄文 |
| 6 | ヨレ遺跡 | 大字匹見字芋田 | 集落 | 縄文・弥生 古墳・奈良 | 22 | 能人遺跡 | 大字匹見字荒木 | 散布地 | 古墳 |
| 7 | 半田遺跡 イセ地区 | 大字匹見字半田 | 散布地 | 古墳・奈良 | 23 | 猿地遺跡 | 大字紙祖字荒木 | 散布地 | 弥生・古墳 奈良 |
| | サイカチ地区 | 大字匹見字半田 | 散布地 | 弥生・古墳 奈良 | 24 | 福田ノ上遺跡 | 大字紙祖字荒木 | 集落跡 | 縄文・弥生 |
| | 八坂地区 | 大字匹見字半田 | 散布地 | 古墳・奈良 | 25 | 下正ノ田遺跡 | 大字紙祖字荒木 | 散布地 | 縄文・弥生 古墳・奈良・平安 |
| | 美濃殿地区 | 大字匹見字半田 | 散布地 | 縄文 | 26 | 水田ノ上地区 | 大字紙祖字荒木 | 集落跡 | 縄文・弥生 |
| | 辰美里地区 | 大字匹見字半田 | 散布地 | 縄文・弥生 古墳・奈良 | | 水田ノ上地区 | 大字紙祖字荒木 | 散布地 | 縄文・弥生 奈良 |
| | 城ノ後地区 | 大字匹見字半田 | 散布地 | 弥生・古墳 奈良 | | 木戸開中地区 | 大字紙祖字荒木 | 散布地 | 縄文・弥生 古墳・奈良 |
| | 木ダ網地区 | 大字匹見字半田 | 散布地 | 弥生・奈良 | 27 | 長グロ遺跡 | 大字紙祖字元郷 長グロ | 散布地 | 弥生・奈良 |
| 8 | 上黒和遺跡 | 大字匹見字黒和 | 散布地 | 弥生 | 28 | 石ヶ坪遺跡 | 大字紙祖字乙佐原 | 集落跡 | 縄文 |
| 9 | 先ハズ遺跡 | 大字匹見字黒和 | 散布地 | 縄文・弥生 奈良 | 29 | 家賀り遺跡 | 大字紙祖字小原 | 散布地 | 縄文・弥生 |
| 10 | 川原田遺跡 | 大字匹見字山根上 | 散布地 | 縄文 | 30 | 新井尾畠遺跡 | 大字紙祖字三裏 | 散布地 | 奈良・平安 |
| 11 | 和田古墳 | 大字匹見字山根上 | 古墳 | 横穴式石室 | 31 | 牛首古墳 | 大字石谷字内石 牛首 | 古墳 | 横穴式石室 |
| 12 | 永長山古墳群 | 大字匹見字山根上 | 古墳 | 横穴式石室 | 32 | 十井田遺跡 | 大字石谷字内谷 十井田 | 散布地 | 縄文 |
| 13 | 越崎遺跡 | 大字匹見字越崎 | 石井 | 弥生 | 33 | 新七遺跡 | 大字石谷字内石 | 散布地 | 奈良・平安 |
| 14 | サノクチ遺跡 | 大字匹見字稚地 | 散布地 | 古墳・奈良 | 34 | 新井尾畠遺跡 | 大字紙祖字二萬 | 散布地 | 奈良・平安 |
| 15 | 土井分遺跡 | 大字匹見字稚地 | 集落跡 | 奈良 | 35 | 森谷遺跡 | 大字紙祖字三萬 | 斜坡 | 平安 |
| 16 | 松田原遺跡 | 大字匹見字稚地 | 散布地 | 弥生 | 36 | コソボリ遺跡 | 大字澄川字能登 | 散布地 | 尖頭器出土 推定地 |

坪遺跡が元祖地区にあり、その小原川の1km上流には縄文晚期の「家廻り遺跡」がある。また野田地区の紙祖川左岸には「前田遺跡」があって、縄文後晩期から奈良平安にかけての遺物が出土している。特に谷平地が広がる荒木地区には、福田ノ上遺跡（縄文・弥生）・捨田遺跡（縄文・弥生）・長グロ遺跡（弥生・奈良）などの各期の遺跡が集中しており、水田ノ上遺跡では多くの上掘貝をはじめ、勾玉、紡錘車形土製品などの出土とともに、土坑や柱穴などの遺構が検出されているのである。

(渡辺 友千代)

◇注(1) 『島根県の地質』 島根県 昭和60年8月発行



第3図 上ノ田地点配置図

第3章 上ノ田調査地点

1. はじめに

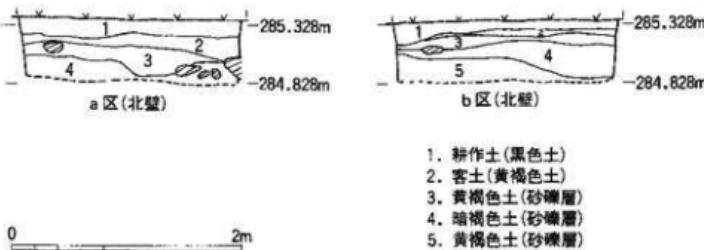
上ノ田地点は、匹見町大字紙祖字野田に所在する。本地点は紙祖川の左岸にあって、北西面は地盤山地を成す下平山（749m）の山裾が緩やかに派生して紙祖川に至る河岸段丘上の水田地に立地する。また地点の北東100mには小谷が紙祖川に合流しており、その小扇状を成す扇端に位置し、標高約285.37mを測る。

調査は、昭和63年5月16日から5月21日までの間のうち、3日間を費やして行ったが、耕作土以下には出土物はなく自然層であった。

2. 調査の概要

調査区は、東南面に比高約2m測る段丘をもつ約200m²の水田地に2坑設けることにした。まず、県道匹見左近線側の山寄りの地点に磁化を基準とする2m×2mのa区、そしてa区から紙祖川側（東）に4m延ばし、2m×2mのbと称する調査区を設定した。

構造は、1層水田耕作土、2層客土、3層黄褐色土、4層暗褐色土、5層黄褐色土となり、全体的に東南面が層厚で、北西面が薄い。円礫も多く、小谷の数次の氾濫を想像させる。なお、1層の耕作土に数片の陶器が確認されたものの、それ以外の層では遺物の出土はなかった。



第4図 上ノ田地点土層断面図

3. 各調査区の概要

a 区 2 m の方形区で 4 m²。1 層は耕作土で数年前の畠地転用のために黒土を呈し、小礫が混ざる。層厚は約 10~13 cm あり、ほぼ水平。2 層は粘性の黄褐色を呈した砂土で、僅かに砂礫を含む。西壁面（山側）寄りは 4~6 cm で、北壁・南壁とも東西に向って深く嵌入し、その端面は層厚 17~20 cm を測る。しかし東西側の下半は漸移に砂礫に変化し層界をよみとることが困難である。3 層は砂礫を多く含む黄褐色土で、若干の人頭大の角礫を含む。北壁を見るかぎり、東壁に向って尖滅するが他面の壁では 3~20 cm の層厚を確認することができる。これは小谷からの流出嵌入層といべきもので、乱線を描く。4 層は暗褐色土で、人頭大の角礫、若干の川砂礫を含む。

b 区 2 m の方形区。現地表面積高は a 区より約 3 cm 低い 285.348 cm で、若干北西面に傾く (2 cm)。1 層は耕作土ではほぼ水平に堆積する。西壁面に 3 層に 8~10 cm 嵌込む陥ち込みがみられるが人为的によるものか自然かは判らない。2 層の黄褐色砂土は 2~7 cm の層厚で、一部に粘性がみられるが、砂粒を含み、部分的には尖滅する。3 層は砂礫を含む黄褐色土。4 層は暗褐色土で、2~5 cm の角礫を含み、以下は淡褐色した砂質土に変化する。北西面（山側）の層厚は 3~7 cm であるが、南東面（紙祖川側）に向って深く陥ち込み、約 20~30 cm の層厚を測る。これは本域の地形勾配によるものとみられる。

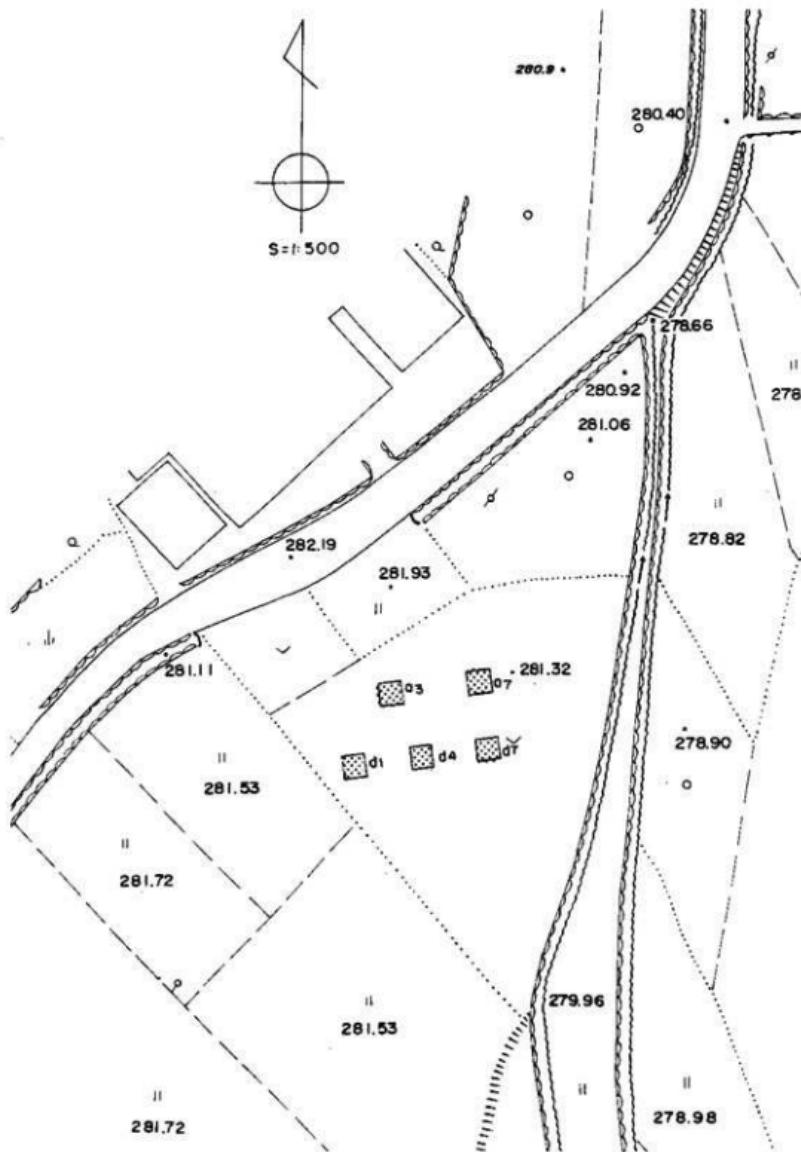
両調査区とも耕作土に数片の陶磁器を出土した以外、何ら検出されなかった。（渡辺友千代）

第4章 前田調査地點

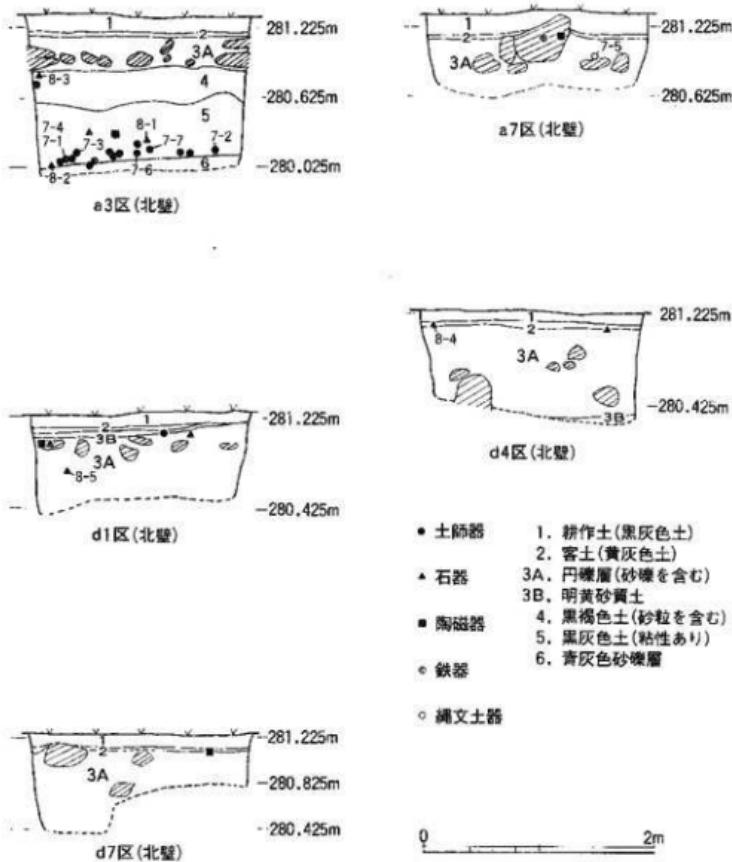
1. はじめに

前田地点は、匹見町大字紙祖字野田に所在する。本地点は、下平山 (749m) の麓下にあって、100 m 東面を紙祖川が北東流して匹見川へ合流する。現地表面標高約 281.32 m 測るが、南東面は約 3.3 m の石垣をもって陥ち込んでいる。本域は紙祖川との比高差僅か 5, 6 m すぎず、河岸段丘上といつても顕著ではない。そのため旧くから紙祖川の溢流による周流地だったらしく、下平山の山裾を水流が広く掘削した跡がみられる。現状は水田を転用した約 117 m² の畠地。

調査は昭和 63 年 5 月 19 日から 5 月 30 日間のうち、6 日間を費やして行った。調査区は 2 m × 2 m の方形を 5 館所とし、計 20 m² を対象にした。調査にあたって、まず北の基線を西端にとり、そして南へ a, b のアルファベットを、東に向って 1, 2, 3 の数字で表示した区名とした（第 5 図前田地点配置図参照）。



第5図 前田地点配置図



第6図 前田地点土層断面図

2. 調査の概要

全体の層序は、1層の黒灰色土、2層黄灰色土、3層は砂礫を多く含む円礫層と明黄砂質。4層は粘質の黒褐色土、5層は青灰色した砂礫層に分層される。また地点によって多少の差異がみられる。例えばa区でいう円礫層の3層は、層厚約30cmであるのに対して、特に南東側(紙祖川側)は砂礫を多く含み厚い。これは紙祖川による砂嘴地形によるものと思われ、尖質的の河床礫といえる。

また3層で細分した明黄砂質土なども紙祖側の砂嘴の痕跡で、本城が数次による溢流地であったことが判る。

遺物は調査対象地の北西面を中心に出土し、a3区ではその5層の黒褐色土で土師器を中心に石器も出土する。また陶磁器・鉄器・繩文土器なども定義的な垂直分布の状況ではなく、上下が逆転するなどの搅乱的様相を示す。遺物は土師器片17点、石器9点、陶磁器4点、繩文土器1点、鉄器1点の計32点が出土。

3. 各調査区の概要

a3区 北西側（山側）に位置するグリッドで他のグリッドとは異なり、遺物を多出する5層の黒褐色土、6層の青灰色砂礫層が嵌入する。

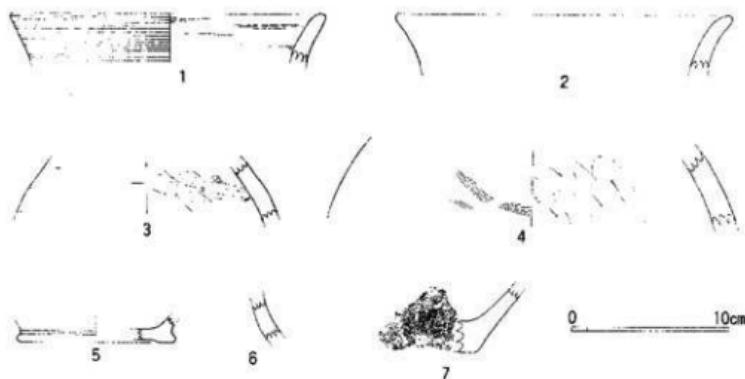
a7区 1層耕作土、2層客土、3層は人頭大から50cmあまりの石塊を含む円碟と砂礫から成る。特に砂礫は酸化鉄によって固着する。3層上部に馬鍔の鉄先・陶磁器片。また中央部に繩文族部が出土。その以下は同様な層が続き、実質的な河床疊と想定される。

d1区 1層は黒灰色土の耕作土、2層は砂粒を含む黄灰色土（客土）で、東壁（紙祖川側）に向って尖滅し、3層の明黄砂質土と相会する。レベル的に南東側（紙祖川側）が微高（約3cm）であるのは、紙祖川の砂嘴によるもので、したがってa3区の5層（黒褐色）は後背湿地による沢地の存在層といえるものであろう。またこの3層は砂質土と円碟層とに細分したが、特に前者の砂質土は広範囲なものではなく、局部的な嵌入層であって層厚3~4cmと薄く、やはり東壁に向って2~3cm上昇しながら尖滅する。円碟層は人頭大のものから50cmあまりの石塊と砂礫から成り、所々に酸化鉄が付着する。

d4区 d4区は耕作土、客土、円碟の3層から成り、現地表面標高約281.230mで、調査区中もっとも低い（約10cm）調査区。1層の耕作土（黒灰色土）は層厚7~10cmで比較的水平、2層の客土は砂粒を含む黄灰色土で、層厚2,3cmで、ほぼ水平。この層から2点の銅片石器が出土する。3層は、人頭大から40cm余りの石塊から成り、砂礫を含み上部には部分的に赤茶色した酸化鉄がみられる。また下層に明黄砂質土がみられるがこれは部分的に嵌入したものと思われる。

4. 出土遺物

土器（第7図上器実測拓本図 図版4~2） 7-1は口縁部で、外面に顯著なハケ目がみられるが、撫で仕上げ。内面もハケ目調整した後、撫で仕上げる。色調は黄灰色を呈し、胎土はきめ細い。7-3は胴上半で外面で笠磨きし、内面は笠削り。色調は、黄灰色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成はきわめて良好。7-5は繩文土器の底部。底面は外面縁が高まりを成し、中央は4mm

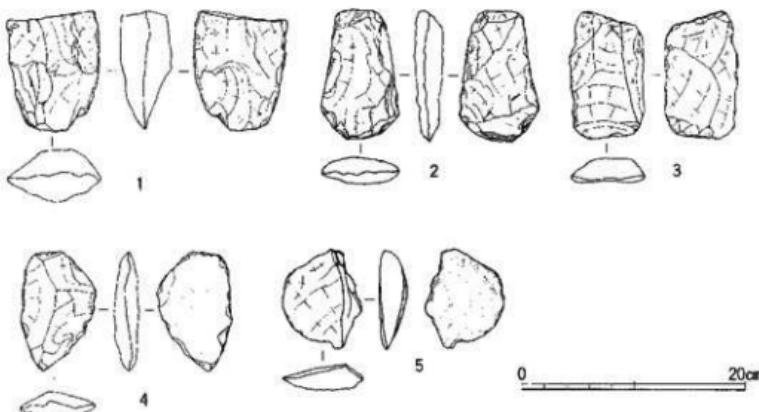


第7図 前田地点出土土器実測拓本図

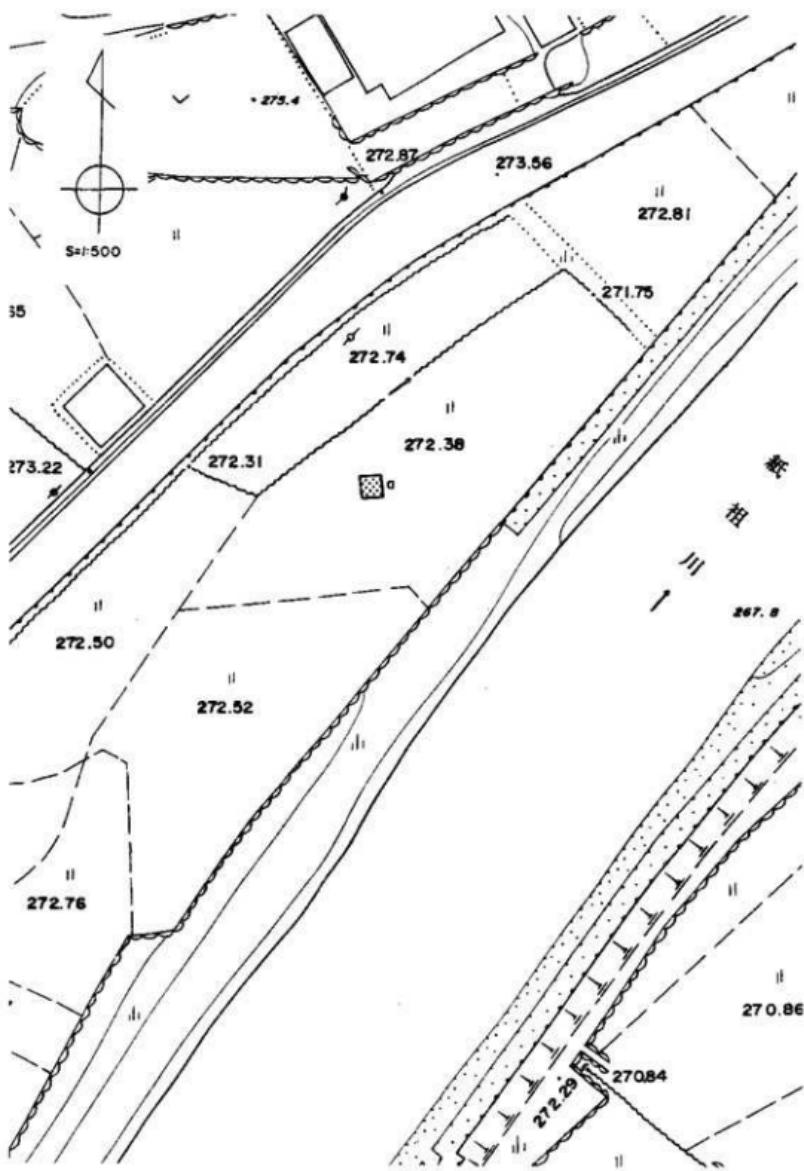
の揚げ底となり、丁寧に施磨きする。7-7は底部。底部はぶ厚く、外面に縦目の範囲が数次にみえ、2・3 mmの石英等が混入。色調は赤褐色を呈し、焼成良好。

石器等（第8図石器実測図 図版4-2）8-1は半折した打製石斧。石材は安山岩で、灰色に風化する。刃部から数次の加撃をし、周縁は丁寧に剥離を加える。最大器幅7.8cm、最大器厚4.3cm、器重は399.5gを測り、両凸刃を呈す。8-2は彫形打製石斧。石材は安山岩で、灰色に風化する。8-4は三方から打撃を加えた後、周縁に丁寧な剥離を施す。用途的には石鎧的な機能をもつ。

またその他、陶器数片、馬歛の鉄齒が出土した。



第8図 前田地点出土石器実測図



第9図 前田道ノ下地点配置図

これらの土器・石器は山寄り（北西）のa3区を中心に出土したが、他の調査でもみられるように、垂直分布状況に逆転がみられるものもある。これは旧く本城が数次の溢流による洗流地であつたらしく、漂流堆積した様相を示しているといえる。また調査区には層序的に差異も認められ（例えばa3区とその他の調査区）分布に疎密・あるいは時期別も認識される。これは洗流地に加え、至近の分布距離差の影響と思われる。したがって縄文土器は南東（紙祖川寄り）側の上層部に、また上部器は北西側の下層に出上し、石器はばらつきがみられるなどの差異が認められる。

（渡辺 友千代）

第5章 前田道ノ下調査地点

1. はじめに

前田道ノ下地点は匹見町人字紙祖の野山に所在する。この域は、南東に紙祖川が北西に流し、20m北西には標高749mの下平山の山裾がせまる標高272.38mの河岸段丘の水田地に立地する。

地点と紙祖川の距離は10mを測り、しかもその比高差は4mに満たないため、耕作土、客土層以下は実質的には河床疊であり、調査は1区とし、増設はしなかった。

また調査は昭和63年5月24日から昭和63年5月25日の2日間を費やして行なった。

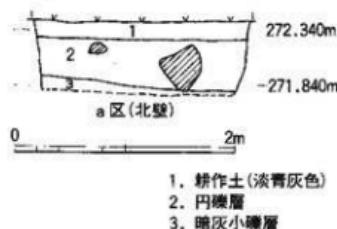
2. 調査区の概要

調査区は紙祖川に面した現地表面標高約272.38m測る休耕田に設けることとした。グリットは磁北に任意に設定し、2m×2mの方形区aとし、遺物の検出が確認された場合、増設していく予定であったが、耕作土、客土層以下は河床疊に覆われていて、調査は困難をきわめるとともに、自然層と想定されたので1区のみとした。

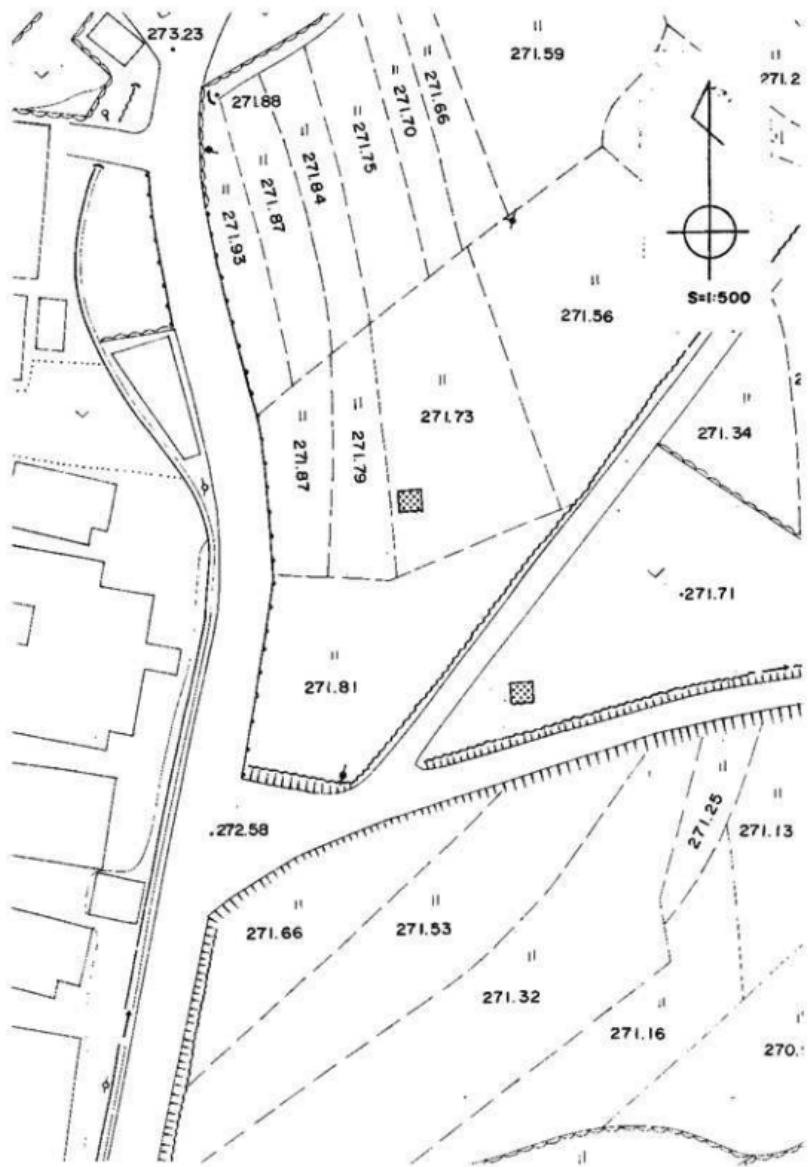
地点表面標高は272.260mあり、僅か(1.5cm)

南東に傾く。1層の耕作土は湿水を帯び淡青灰色を呈す。層厚は約15cmあり、ほぼ水平。2層との層界ははっきりせず、底土を成す客土は流出したものと思われる。2層は石塊を多數含む円疊層で、約40~50cmの層厚があり、南東には本層が1層（耕作土）の機能を満たしたものと思われる。

いずれの層からも文化遺物は検出されなかった。



第10図 前田道ノ下地点土層断面図

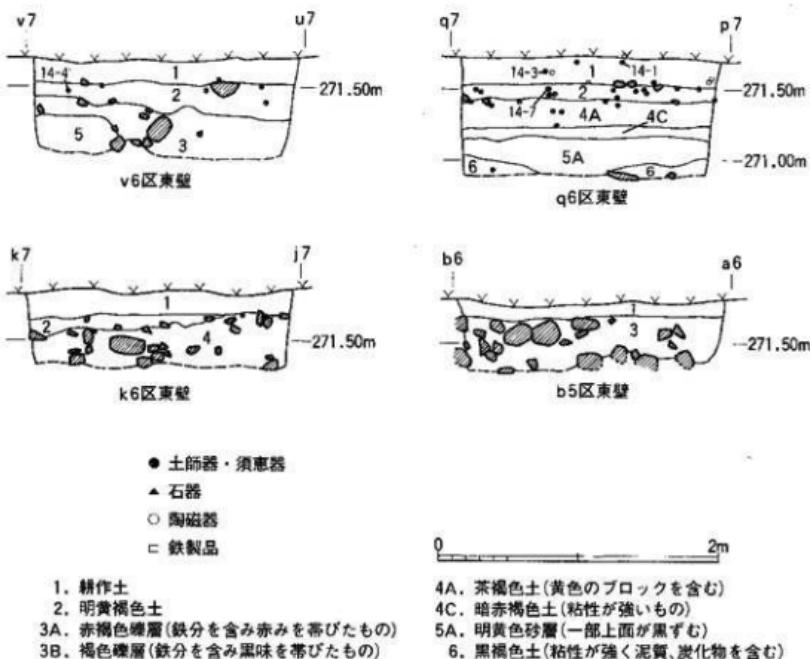


第11図 善正町地点配置図

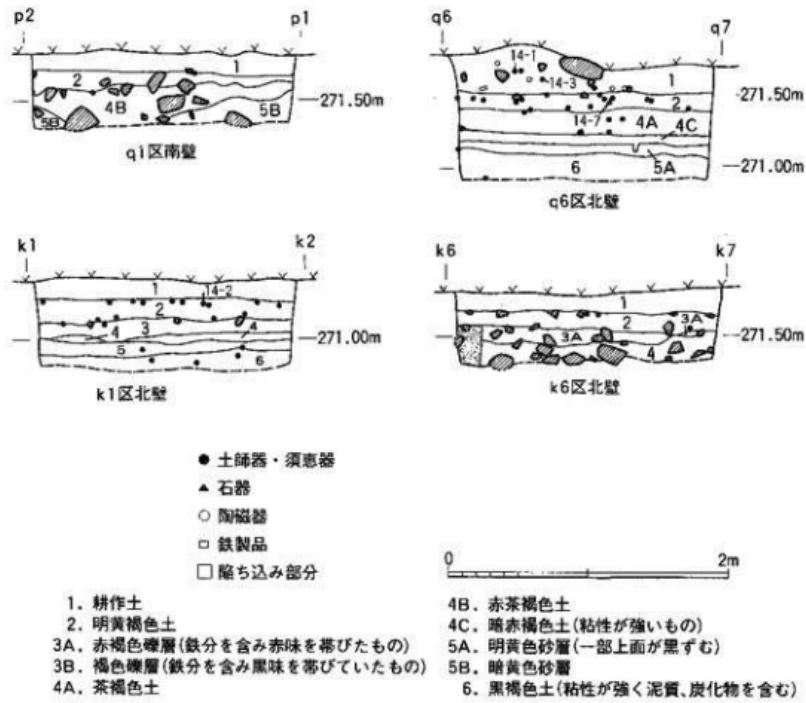
第6章 善正町調査地点

1. はじめに

善正町遺跡は匹見町大字紙祖の岡本に所在する。本遺跡は匹見川支流の紙祖川左岸の河岸段丘に位置し、標高は約271mである。紙祖川をはさんだ対岸の段丘上には水田ノ上遺跡、檜田遺跡、木戸開中遺跡といった遺跡が知られており、当地点でも遺跡の存在が予想されたため試掘を行なうこととした。調査は昭和63年8月5日から8日まで、9月15日から18日までの8日間を費やして行ない、その結果、土師器片、須恵器片、陶磁器片などが出土し遺跡と認定された。現状は休耕田で、調査面積は約24m²である。



第12図 善正町地点土層断面図(1)



第13図 善正町地点土層断面図(2)

2. 調査の概要

調査にあたっては、まず当調査地域に磁北を基準として南北に a, b, c …… v、東西に 1, 2, 3 …… 7 の方形区画 (2×2 m) を設定し、およそ調査の可能な山42×12の範囲を覆うことができるようとした。各調査区は北西杭をもって当該区の名稱とし、b5区、k1区、k6区、q1区、b6区、v6区の6区を発掘した。

各調査区の基本層序は、上層より第1層は耕作土、第2層は明黄褐色土層、第3層は褐色礫層、第4層は茶褐色土層、第5層は黄色砂層、第6層は黒褐色土層となる。また色調、粘性などの異なった部分を区別するため、第3層はA,Bに、第4層はA～Cに、第5層はA,Bにそれぞれ細分される。

今回の調査による出土遺物は土師器片、須恵器片、陶磁器片などで、遺物はb5区を除いた5区すべてから出土しており、特にk1区、q6区に集中してみられる。遺物の包含層と考えられるのは第2層で、第4A層にも少量であるが散在している。

3. 各調査区の概要

v6区 調査区のうち北端部に設けたもので、現地表面は約271.70mである。第2層は緩やかに第4A層は中央付近より急激に南東方向に傾斜しながら堆積している。地表面より70cm程度掘り下げたところ、第5A層が各壁面に見られたが、東壁の南側と南壁の東側では現れていない。

第2層中から上師器、須恵器が6片出土した。

q6区 v6区の南側8mのところに設けた調査区で、現地表面は約271.70mである。第1層、第2層、第4A層、第4B層それぞれほぼ水平に堆積している。第5A層は東壁に見られるように中央付近で層厚が増しており、そのため第6層が途切れている。

本区はK1区とともに遺物が集中している。第1層では陶磁器片、土師器片、須恵器片、鉄製品が混在して見出され、第2層からは土師器片、須恵器片のはか砥石と思われる石器が出土した。また、第4A層、第6層からも極めて微少な土器片が検出されたが、詳細は不明瞭である。

k6区 v6区の南側20cmのところに設けた調査区で、現地表面は約271.85m。第1層はほぼ水平に堆積しているが、第2層は南側から北側に緩く傾斜しながら堆積している。第3層は20cm大の礫を多く含む層で、色調によってそれぞれ第3A層、第3B層に細分される。また、北西隅には第3層上面から基底面にかけて黒褐色の陥り込みが認められたが、遺物は出土しておらず、性格は不明である。

遺物は第1層から陶磁器片が出土したほか、第2層中より土師器片が3片出土した。

b5区 調査区のうち南端部に設けたもの。現地表面は約271.80m、第1層の下層は、20cm程度の礫を多量に含んだ第3a層となる。

本区では地表面より約50cm掘り下げたが、遺物は出土しなかった。

q7区 q6区の西側8mのところに設けたもので、現地表面は約271.80m。第1層、第2層ともに水平に堆積している。第4B層との界は凹凸が激しく、南壁では色調によって細分された第5A層と第5B層が第4B層によって途切れたかたちとなっている。また、東壁面では第4B層の一部に強粘性の濃青灰色土が見られる。

遺物は第1層中から須恵器片などが数点出土したほか、第2層下面より土師器と思われる土器片が1点ばかり出土した。

k1区 k6区の西側8mのところに設けた調査区、現地表面は約271.80m。北壁面においては

各層それぞれ水平に堆積しているが、東壁では第6層が南側から北側にかけて傾斜しているため第4A層、第4C層、第5A層が中央付近でそれぞれ途切れている。

本区ではq6区とともに遺物が集中して検出された。第1層からは陶磁器片、土師器片、須恵器片が、第2層からは土師器片、須恵器片がそれぞれ出土した。また、第6層からも極めて微小な土器片が出土しているが、詳細は不明瞭である。

4. 出土遺物

今回の調査による出土遺物の総数は約70点で、土師器、須恵器、陶磁器のほかに砥石とみられる石器や鉄製品が出土している。

土師器 出土総数は小破片も含め20数点である。k1区、k6区、q1区、q6区、v6区の第2層および耕作土中より出土した。

①はq6区耕作土中からのもので、胸部と思われる。調整にヨコナデを施し、内面は風化が著しく不明瞭である。胎土中に1~5mmの大砂粒子を含み色調は外側が茶褐色、内面が赤褐色である。

須恵器 17点あまり出土した。遺物はk1区、q6区、v6区の第2層および耕作土中より出土している。

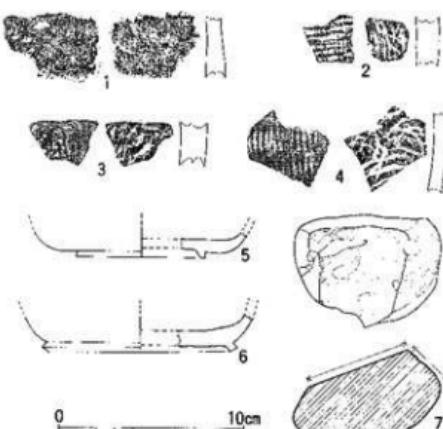
②はk1区第2層出土、③はq6区耕作土より出土。ともに大型甕の破片と思われる。両破片とともに調整は内面にタタキのあて具の痕跡が顕著で、外側にタタキ目が施されている。色調は灰色。

④はv6区第2層出土の甕胴部片である。調整は内面にタタキのあて具の痕跡が顕著で外側にタタキ目が施されている。色調は内外面ともに灰色を呈する。

⑤はk1区耕作土より出土の壺片である。調整は内外面に回転ヨコナデを施している。胎土は密で焼成は良好。色調は内外面ともに暗灰色を呈する。

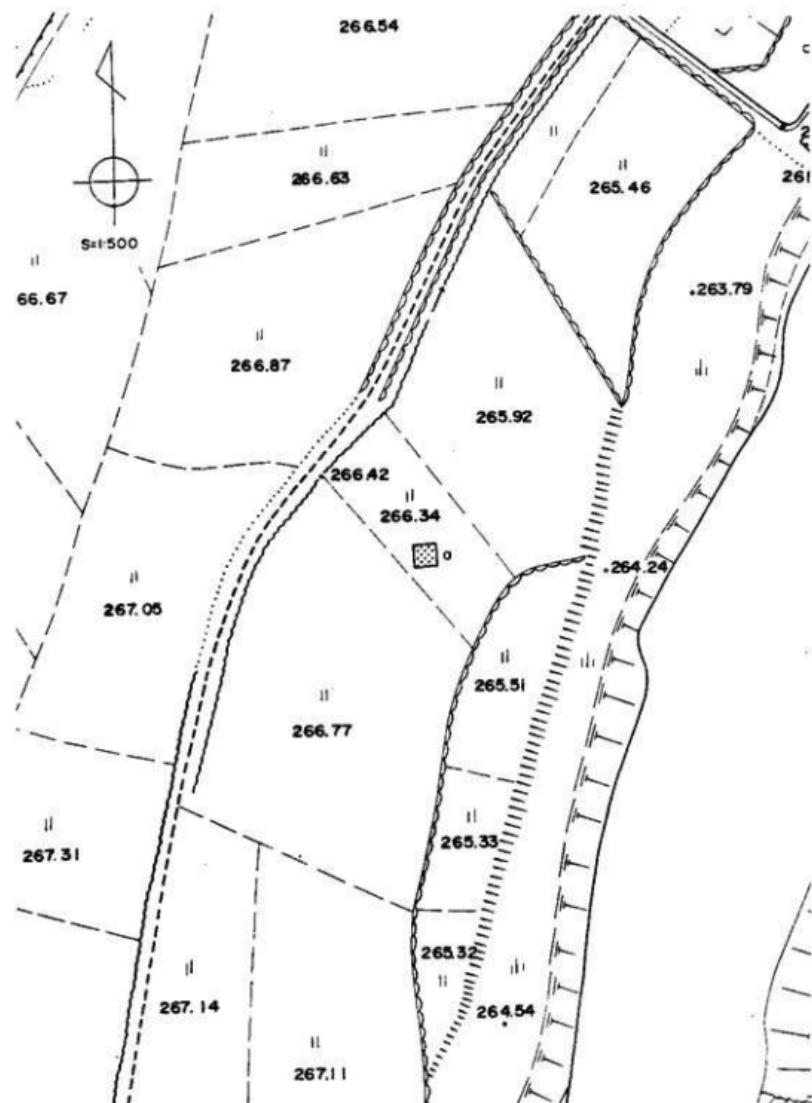
⑥はq1区耕作土より出土の須恵器片で、器外側には淡緑色の釉が掛っている。調整は外側に回転ヨコナデ、内面にナデが施され、胎土は密で焼成は良好である。色調は内外面とも白灰色。

石器 ⑦はq6区第2層出土の砥石である。表面と一側面に擦痕がみられ、一側面には不規則な条痕状の擦痕が認められる。材質は不明。



第14図 善正町地点出土土師器・須恵器・石器

その他 耕作土中より近世の陶磁器片が10点あまり出土した。(赤坂 二史)



第15図 曾利田地点配置図

第7章 曾利田調査地点

1. はじめに

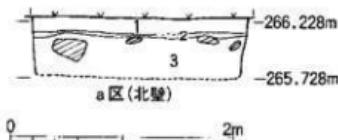
曾利田地点は、匹見町大字紙祖字岡本に所在する。その地点は南東面約7m地点を紙祖川が比高差約4m測って北東流し、また北西面は標高749mの下平山の山裾がせまつていて、北東—南西に走る狭長な河岸段丘に立地している。

調査は水田地が広がる紙祖川面に接した休耕田を対象として設定し、1区(2m×2m)のみを試掘した。調査は昭和63年5月19日から昭和63年5月20日の2日間を要して行ったが、遺物は確認されなかった。

2. 調査区の概要

調査区を設定した地点は、紙祖川に面した約40m²の休耕田とし、そのほぼ中央に磁北をもつて2m×2mの方形区とした。地点の現地表面標高は266.288m測り、そこは紙祖川から階段状を形成した一画に位置する。

1層は灰色を呈した耕作土で、層厚13cmから14cmを測り、僅か低位に砂粒を含む。2層は黄色を呈した砂質土で、一部砂礫を含んだ灰色土があって、薄厚がみられる。3層は多量の砂礫を含む円礫層30cmの大の石塊もみられ、実質的な河床礫。遺物はいずれの層とも無かった。(渡辺友千代)

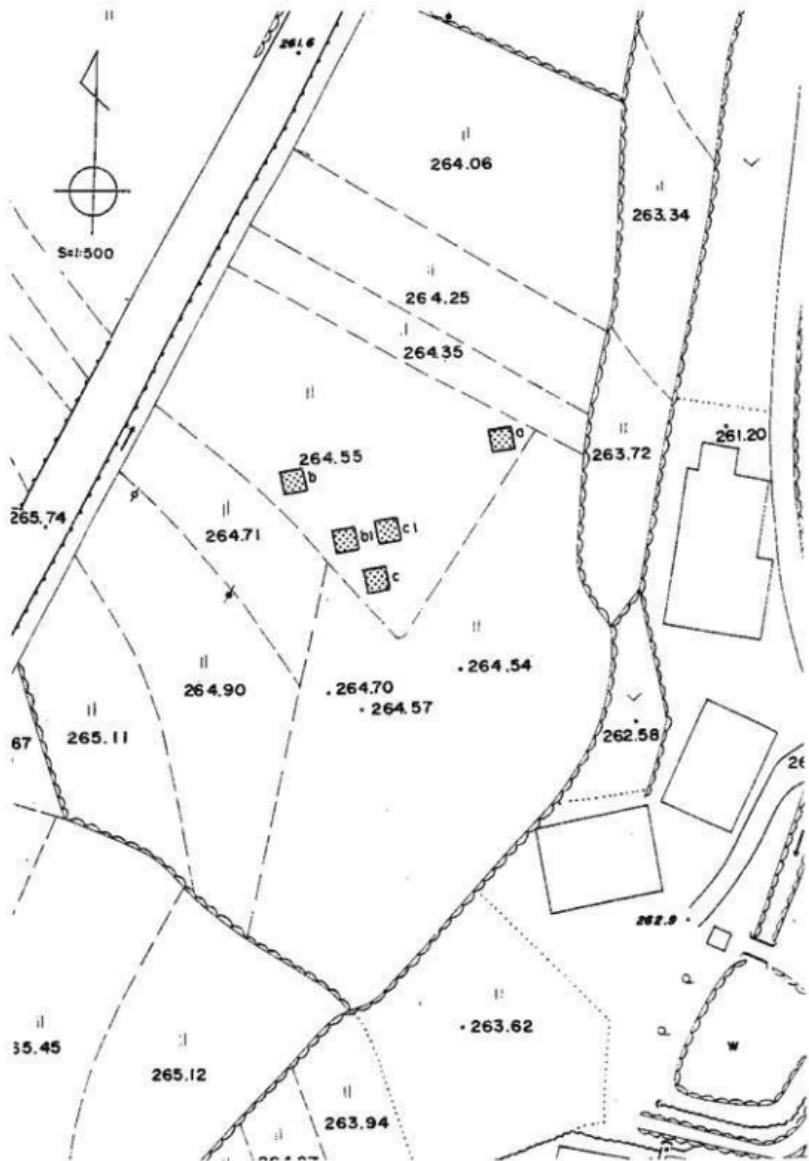


第16図 曾利田地点土層断面図

第8章 前田尻調査地点

1. はじめに

前田尻地点は、匹見町大字紙祖の岡本に所在する。本地点は西側からせまつた下平山(749m)の山裾にあって、東面には紙祖川が北東流し、それに沿って狭長な河岸段丘が形成された立地に位



第17図 前田尻地点配置図

置する。段丘は紙祖川から階段状に形成されていて、比高差約5mあり上段部は比較的平坦で標高約264.55mを測り、水田地が広がる。また山脇には町道岡本線が紙祖川に沿って通り抜けており、至近の上流野田地区には縄文・弥生・古墳などの各期を検出した前田遺跡等がある。調査は、昭和63年5月20日から附和63年5月30日のうち6日間を費して行った。

2. 調査概要

調査地点は河岸段丘面が顯著で、しかも比較的高位面を成した地点を設定することとした。その地点は派生した山裾と段丘端にあたる水田地で約270m²の範囲を調査対象にした。

調査は良好地とみなされたので、できるだけ状況を閲知するために基準を東側の段丘端（紙祖川面）に設けた。これは段丘端の状況を把握するためと一方調査対象地の全体を把握し易い地点とみなしたからであった。

まず東面の段丘端に基点を設け、その基点を中心にして2mの方形区のものをa区とし、そして西側19m地点にb区と称する2mの方形区を設定し、これを主軸とした。b区の5層で数点の打製石斧等が出土したので、b区から主軸に沿い4m返り、その点から南面を探るために4m延し、その点にc区と称する2mの方形区を設定する。c区で遺物の集中度合が高いので、さらに主軸（北側）方向の2m地点に、b区寄りをb1と称するものと、a区寄りの区をc1区と称するものを2m範囲内に並行して2mの方形区を設定した（第17図）。調査面積は20m²で、基準はすべて磁北とした。

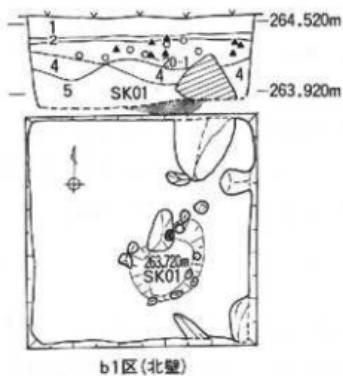
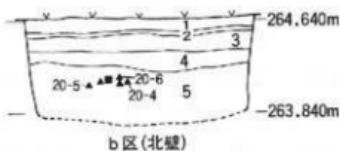
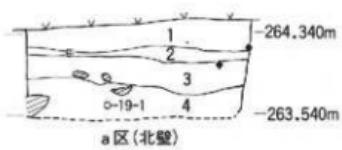
3. 各調査区の概要

a区 1層は耕作土で黒灰色を呈す。東壁面の層厚は約16cmを測るが、西壁面向って上昇して厚くなり、約28cmを測る。これは畦畔寄りのため、標高的に約7cm高い。2層は黄褐色を呈した客土。層厚にはらつきがあり、砂粒を含む。上下層界面に2点の須恵器が出土した。3層は暗褐色上で、上部面に酸化鉄がみられ、下部面に数箇の円礫を含む。4層は黄色を呈した砂質上で、円礫がみられる。1点の縄文土器が出土した。

b区 a区より約20cm高く、表面標高約264.65mを測る。1層耕作土（黒灰色土）、2層客土、3層酸化鉄を含んだ暗褐色土、4層黄色砂土、5層砂礫層。特に5層（円礫を含む砂礫層）では完品・半折した打製石斧や割片の集中箇所が検出されているが（第18図）この集中は、人為的というより層序的にみて、流出堆積の状況を示しているといえる。つまり円礫層であって、その集結箇所に陶磁器が混入していることから認識できる。

c区 c区は南側の調査区、現地表面標高約264.55mを測る。1層の耕作土は最広部で20cm、最狭部は14cmでばらつきがある。2層は砂質土を含んだ黄褐色の客土。3層は暗褐色上で、上位面に

酸化鉄が沈没し、西壁面は18cmを測り、中央部分で徐々に陥ち込み、東壁に向っては30cmの層厚を割って延びる。低位面に20cmあまりの円碟が数個みられ、石器・剝片・繩文土器等12点が出土。4層は砂疊を含んだ黄色砂土が西壁側に嵌入し、上層部に繩文土器・剝片が各1点づつ出土する。



- 鑄文土器
 - ▲ 石器 1. 耕作土(黒灰色土)
2. 客土(褐色土)
 - ◆ 須恵器 3. 暗褐色土(部分的に酸化鉄を含む)
4. 黄色砂土(部分的に石粒を含む)
 - 陶磁器 5. 砂疊層(円疊を含む)
 - ガラス器



第18図 前田尻地点土層断面図・平面図

b1区 1層の耕作土は層厚14cmから18cmを測り、黒灰色を呈している。2層の客土は約3cmあって、ほぼ水平に延びる。剝片1点が出土する。3層は砂質性の暗褐色土、西壁面は8cmと薄く、下位面は東壁面向って波状に曲線を描き、部分的には30cmあまり層厚があって陥ち込む。縄文土器7点・石器、剝片7点が出土する。3層は石粒を含んだ黄色砂土で、西壁面は15cmあり、東壁面向って陥ち込み、下位線は次第に上昇して尖滅する。そして北壁を見るかぎり、その層界は次第に層厚を増し、そして東壁に向って陥ち込んでいっている。こうした波うちの堆積の仕方は、旧く数次の證流による状況として捉えることができそうである。遺物は出土していない。5層は総体的には砂疊層であるが、他の調査区に比べて石体は小さく、砂粒的であって円礫は少ない。また標高約263.83mを測る下位面に“陥ち込み”(SK01)が確認された。この陥ち込みは暗褐色を呈し、上面の最長径76cm、最短径32cmあって、同径内に11個の配石がみられる(第18図、b1区プラン図)。

c1区 c1区の上層は、1層耕作土、2層客土、3層は砂質性の暗褐色土で、上位面を中心縄文土器・石器剝片が出土する。4層は砂粒を含んだ黄色砂土で、3層との層界線は大きく波状を描く。

4. 出 土 遺 物

本地点では調査面積20m²から、縄文土器28点・石器、剝片28点・須恵器3点・陶磁器1点の計60点が出土した。

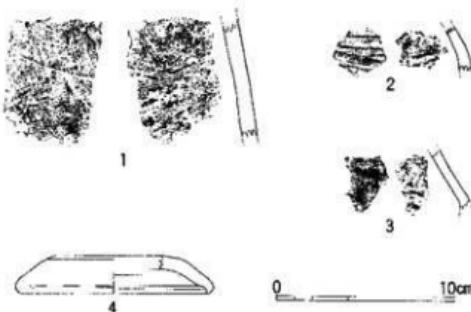
その包含層は3層の暗褐色土を中心としており、縄文遺物が主体であった。

またその縄文土器は全て条痕文を基調とし、小片で、しかも時期的特徴を表出す口縁部は皆無であった。

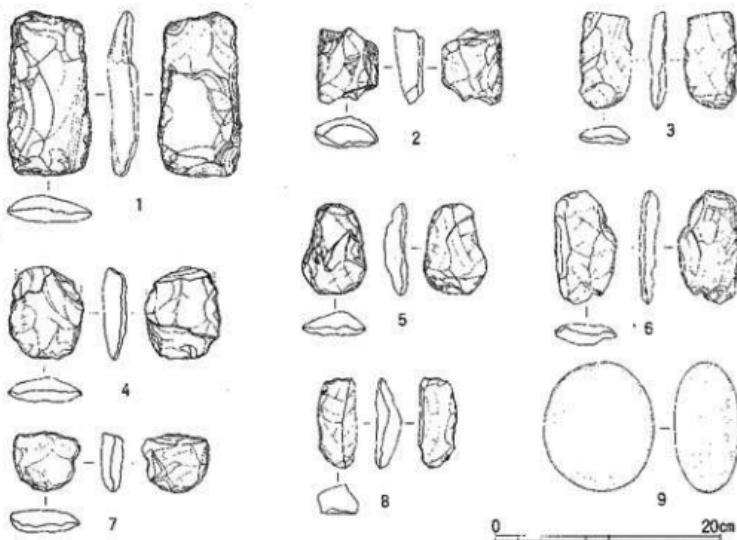
石器は剝片を多とするが、特に打製石斧は半折したものを含めて7点が出土しており、割合からすると高いとい

えるだろう。それらの石材は安山岩を主とするが、中には(第20図-1)ガラス質安山岩も用いている。またその他、磨石等も出土している。

土器 (第19図) 1は縄文土器で、内外とも乱調な条痕を施す。外面下半に煤が付着し、赤褐色を呈し、焼成はきわめて良好。a区の4層で出土。2は、外面を条痕で施し、内面を撫で調整する。胎上に砂粒を含み、焼成良好。3,4は須恵器で、淡青灰色を呈す。4は須恵器で、口縁端部



第19図 前田尻地点出土土器実測拓本図



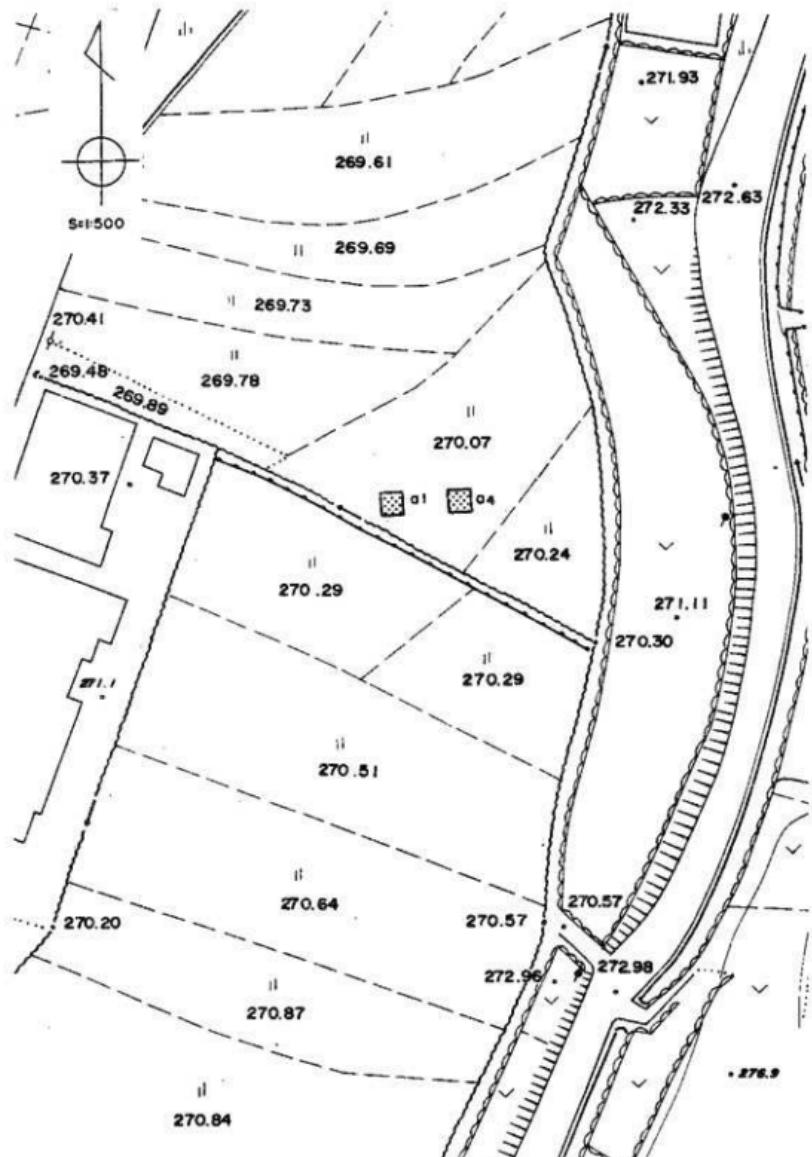
第20図 前田戸地点出土石器実測図

は二角形を呈しやや内傾する。大井部は笠切りとし、内外面に茶褐色を呈した酸化鉄が付着する。

石器（第20図）1は打製石斧。短円状を成し、周辺から數打点の整形の後、周縁部を人念に細部調整する。石材はガラス質安山岩。2は、両端が欠損した打製石斧で、器部は蒲鉾形を成す。3～7も打製石斧で、石材は安山岩。いずれも白っぽく風化しており、器長は約12～14cmと短径。9は磨石。両面とも摩擦痕が認められる。

特徴が認められず、しかも小片であることから上器編年を描き出すことは困難である。しかし、打製石斧の特徴及び山上率等から、周辺遺跡の打製石斧・剝片と共に十器特徴を結び付け合わせると、繩文後晩期のうちでも晩期に近い時期と想定される。また、須恵器も出土しているが、これは数量及び一部の層序の成因からみて、至近の包蔵地からの混入物と認識される。

（渡辺 友千代）



第21図 下正ノ田地点配置図

第9章 下正ノ田調査地点

1. はじめに

下正ノ田地点は、匹見町大字紙祖の荒木に所在する。本地点は、上流から運ばれてきた上砂によつて堆積平地が形成されており、匹見地域でもっとも平坦面が広がった地形位置にある。そのため占くから抜けたらしく、地内には、縄文後晩期を検出した水田ノ上遺跡をはじめ、縄文晩期から弥生後期のものが出土した福田ノ上遺跡、あるいは木戸開中遺跡・檜山遺跡等の周知の遺跡が点在している。

地点は東側約300mに紙祖川が北東流し、西面は童仙山（848m）の山麓がせまり、また南西—北東方向には幅約300mの河岸段丘が紙祖川に沿つて形成されている域にある。

調査は昭和63年5月31日から昭和63年6月9日のうち、5日間を費やして行った。

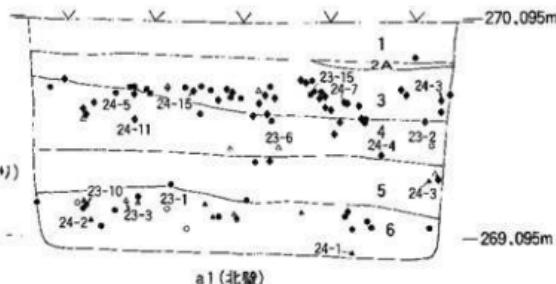
2. 調査の概要

調査は休耕田であった山際の約72m²の「下正ノ田」と称される地点を調査対象地と選定した。その地点は若干湿氣を帯びており、したがつて高位面をなす南北側に基準の地点を設けた。そして磁北方向に2m刻みにアルファベット順にa, b, cと追い、また西方向にかけてやはり2m刻みに1, 2, 3……の数字として進めてゆくつもりであったが深層の泥炭に日数を費やされたので2杭のみとした。つまり、基準点を基点に2m×2mの方形区をa1区と呼称した調査区と、西方向4m地点にa4区と呼称するものを設けたのみであった。

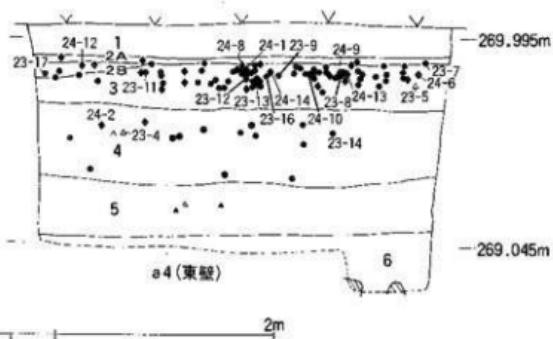
3. 調査区の概要

a1区（第22図下正ノ田地点上層図） 1層は黒灰色の耕作土で、層厚約16cmから19cmあり、僅か西壁寄り（紙祖川側）が厚い。2層は砂粒を含む灰色の客土で、東壁面に偏在し、最厚部で4cmを測る。3層は粘性の強い褐色土であるが、酸化鉄によって赤褐色を呈す。実質的には下層の4層と同質土である。大半の須恵器は本層で出土する。層厚は西壁面寄りが27cm、最狭部は11cmあって西壁に向つて土層下底界は上昇している。4層は粘性の強い暗褐色土で、層厚は西壁面が33cm、東壁面が約21cmで薄い。数点の須恵器・土師器、4点の弥生土器、1点の縄文土器が出土する。5層は湿水を帯びた黒褐色土で、泥炭層である。層厚は16cmから24cmで、僅かに東壁面に向つて陥入する。6層は砂質土で、青灰色を呈している。また下部には湧水帯があり、砂礫を含む。数点の土

- 耕作土(黒灰色土)
- 客土(灰色土)
- 客土(砂礫粒を含む層)
- 暗赤褐色土(酸化鉄による)
- 暗褐色土(粘性あり)
- 黒褐色土(泥炭層)
- 青灰色土(砂礫を含む・溝水あり)



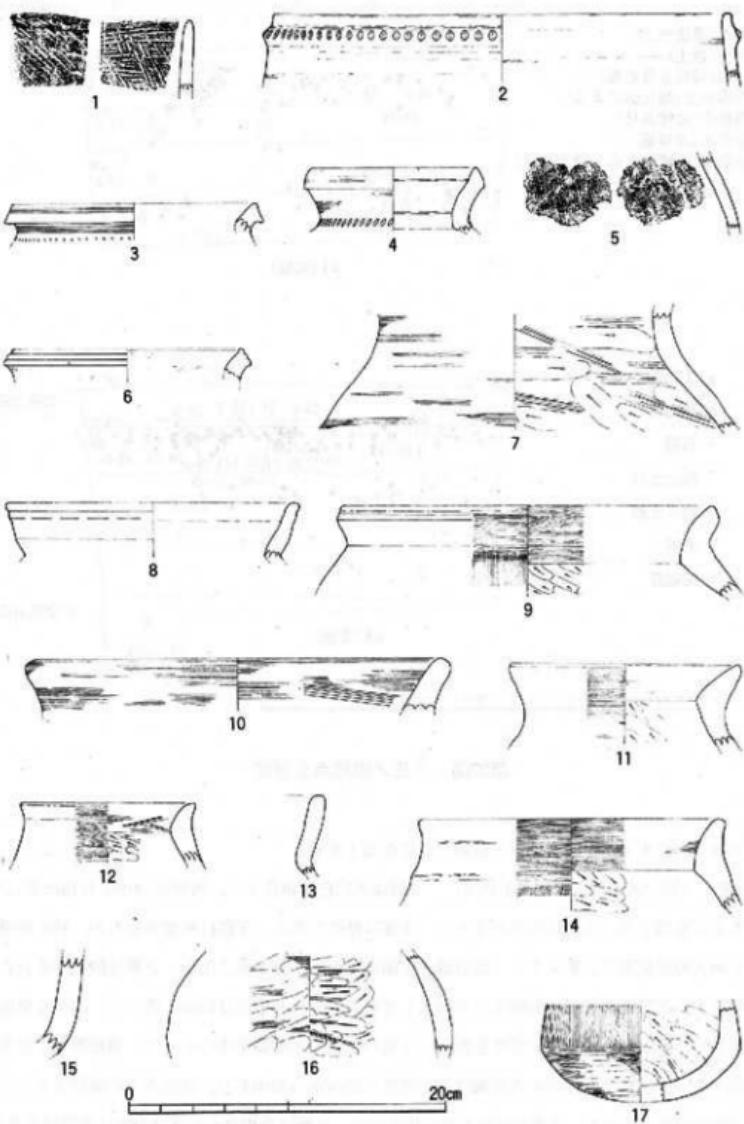
- 土師器
- ◆ 須恵器
- ▲ 石器
- △ 弥生土器
- 繩文土器
- 木器
- 陶磁器



第22図 下正ノ田地点土層図

箭器のほか、弥生土器・縄文土器・石器や剣片が出土する。

a4区（第22図下正ノ田地点土層図） 1層は黒灰色の耕作土で、層厚は14cmから15cmあって、ほぼ水平に堆積する。2層は灰色の客土で、上部は粘性がある。下部は砂礫を含むが、特に西壁面には5mm以上の砂粒溜りが嵌入する。須恵器・土師器などの遺物が数点出土。3層は酸化鉄を含んだ暗赤褐色土。西壁面に2層の砂礫溜りが陥入しているので、西壁面は10cmと薄いが、次第に東壁に向って厚くなり20cmから23cmの層厚を測る。3層の上半に土師器を中心として、須恵器などが集中して出土する。4層は粘性のある暗褐色土。層厚は25cmから32cmあり、ほぼ水平に堆積する。土師器・須恵器の数点のほか、2点の弥生土器が出土する。5層は黒褐色した粘性の強い泥炭層である。本層からは石器2点、弥生土器1点が出土。6層は青灰色した砂質土で、この層の下部は人手から



第23図 下正ノ田地点出土土器実測拓本図

人頭大の円錐を含んだ砂礫層からなり、遺物は伴わない。伏流水による湧水がある。

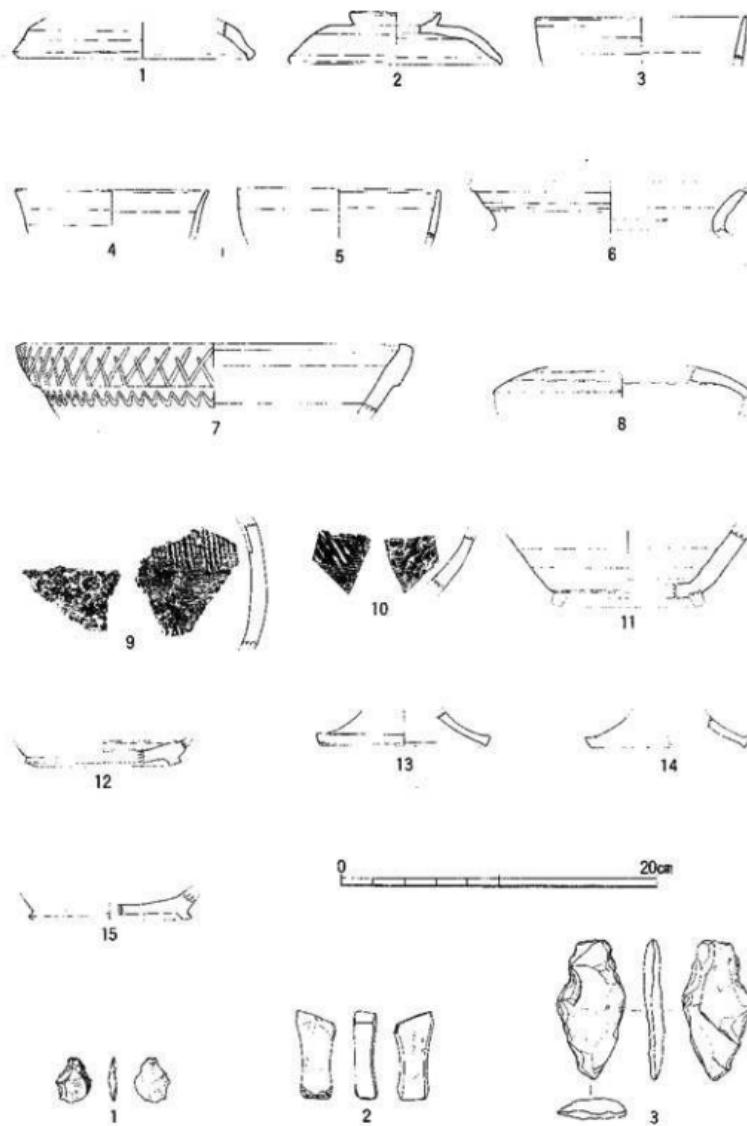
4. 出 土 遺 物

遺物で最も多く出土したのは土師器の105点、次に須恵器の65点で、土師器はa4区の3層に集中する。また須恵器はa1区の3層で、その他弥生土器12点、石器等9点、縄文上器4点、陶磁器4点、木器1点の計201点（括採り上げも含むので実数はもっと多い）であった。a4区では縄文土器は出土しておらず、石器等も2点に過ぎない。

土器 （第23図上器拓本実測図） 23-1は縄文土器。内外とも数次による条痕で施文する直立ぎみの平口縁。口唇部は丸味をもち、内面に酸化鉄・煤が付着する。焼成はきわめて良好で、灰褐色を呈する。23-2は突帯をもつ縄文土器。口縁部はやや内傾し、突帯部に範状施文具で押圧する。色調は黄褐色を呈し、風化が著しくもない。23-3は弥生土器の口縁部。口縁は短く外反し、口唇部外面に範状工具による沈線を施した後、撫で調整する。頸部に施文具による刺突を施し、内面は撫で調整する。色調は淡赤褐色を呈し、焼成は良好。23-5は弥生土器の胸部。外面に縦のハケ目が施され、煤が付着し、内面は範調整する。胎土に僅少の砂礫を含み、灰色を呈し、焼成は良好。23-7は土師器。器肉は厚く、頸部にかけてゆるやかに屈曲し、外面は撫で仕上げであるが、横方向に数次の施文具痕が残り、内面は範ケズリ。胎土に微砂粒を含み、淡茶色を呈す。23-14は土師器の口縁部。口唇部は丸味をおび僅かに外反し、外面、内面ともハケ目調整した後、撫で仕上げを施すが頸部下位内面は範ケズリ。胎土に2,3mmの砂粒を含み、灰色を呈す。23-17は土師器。外面の胴上半部は内湾ぎみに立ち上がり、縦にハケ目を施す。胴部最大径付近に半截竹管状の施文具による沈線を1条通す。屈曲する底部にかけては横にハケ目を施す。器形は須恵器を想像させ、その所産は古墳期のものかも知れない。内面は範調整とし胎土に砂粒を含み、赤茶色を呈す。

須恵器 （第24図土器拓本石器実測図） 24-1・24-2は杯蓋で、24-2の口径は約13.5cm、器高3.4cmを測る。つまみは輪状で、口縁部は内窪して下り、端部は内傾する。内外とも回転撫であるが、内面天井部は静止撫で。色調は灰色を呈し、器面は酸化鉄が付着する。24-3・24-4・24-5は杯身。24-3・24-5はやや外反して立ち上がるが、端部は内傾する。24-4は外反気味の口縁部で、端部は薄い。24-6・24-7は要の口縁部。24-7は口径約24cmを測り、器肉は厚い。突帯部分に範状施文具による斜格子文を施し、その下には波状の沈線を施す。口縁部の端部は外に傾き、口唇部は丸味をもって内傾する。色調は内外とも自然釉による光沢のある青色を呈し、胎土は白で、焼成はきわめて良好。24-8は臺の肩部。24-12は杯の底部で、高台はハの字形に外に開き、底部外面は回転範切とする。

石器 （第24図土器拓本石器実測図） 24-1はガラス質安山岩で、a1区の6層に出土した剝片



第24図 下正ノ田地点出土土器拓本石器実測図

石器。最大長3.8cm、最大幅3cmを測る。背面の主要加擊点は3方にあって、その2方に丁寧な剝離痕がみられ、一方は原面である。腹面は側面からの單一打撃による剝離をなしている。24-2は砂岩質の砥石。4面は使用痕により凹状を成し、全面にわたって筋状の搔目がみられる。層位的には5層から出土したもので、形状また使用痕には飲器類の使用を考えられそうである。24-3は安山岩質の楔形土掘具。粗く調整した後、一部側縁を剝離して調整する。全面は灰色に風化する。

(渡辺 友千代)

第10章 早苗口頭調査地点

1. はじめに

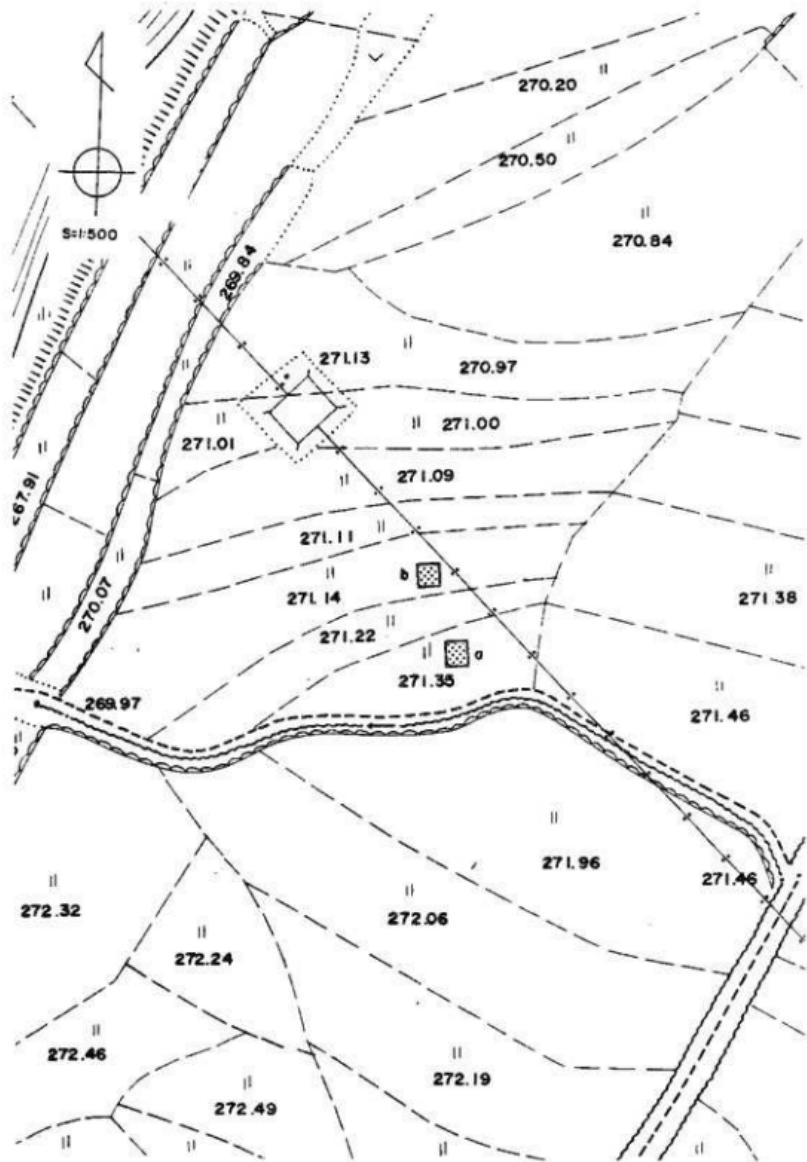
早苗口頭地点は、匹見町大字紙祖の荒木に所在する。その城は、断層谷によって形成された幅広い河岸段丘上の端部に位置し、30m北側には紙祖川が比高差約6mを測って北東流する（第25図早苗口頭地点配置図）。また南東側は約350mの平坦面が水田域として拓け、その中央部を県道六日市匹見線が紙祖川に沿って走っている。

地点の標高は約271.1mで、調査は昭和63年6月10日から3日間費やし、2m×2mの方形区を2坑として掘った。なお現地は転作田で、本地点の耕作土より1点の弥生土器片が出土したのみであった。

2. 調査区の概要

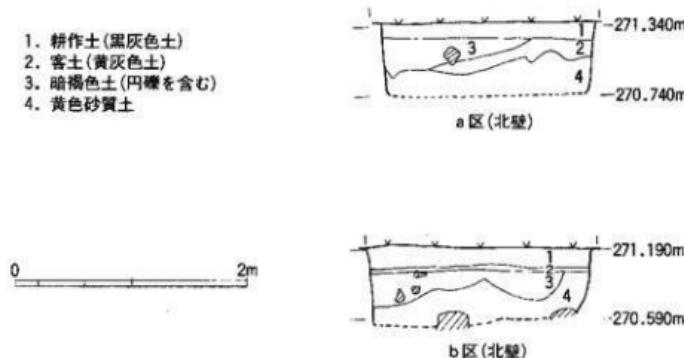
調査区は2m×2mの方形区のものを、転作田であった地名「早苗口頭」に任意に磁北に設定した（第25図早苗口頭地点配置図）。その地点は至近の南側は僅かに高く60cmの石垣が築かれており、その一角の標高約271.35m地点にまずa区と称する調査区を設定した。そして西側（紙祖川側）に2m振り、さらに磁北に向って10m離れた地点に、b区と称する2m×2mの方形区を設定した。その地点は現地表面標高約271.14mで、a区より約20cm低い。

a区 1層は黒灰色の耕作土。層厚は12cmから16cmあって西壁面は薄い。2層は砂粒を含んだ黄灰色土で、東壁上面に偏在し、西壁に向って陥入しながら尖滅する。b区の2層（客土）と色調上質とも酷似するが、層序の成因はわからない。3層は砂質性の暗褐色土で、上面に部分的に酸化鉄が浸沈する。本層は2層と標高的には列層するもので、西壁面は約30cmと厚く、東壁面に向って2層と対比して上昇しながら尖滅している。



第25図 早苗口頭地点配置図

- 耕作土(黒灰色土)
- 客土(黄灰色土)
- 暗褐色土(円礫を含む)
- 黄色砂質土



第26図 早苗口頭地点土層断面図

b区（第26図早苗口頭地点土層断面図） 1層は黒灰色の耕作土で、層厚は14cmから20cmあり、a区より厚い。本層から弥生土器（第27図土器実測図）1点が出土している。2層は砂質性の黄灰色土。層厚は約4cmから7cmあり、西壁に向って低くなる。3層は砂質性の暗褐色土で、拳大の円礫を含む。上面に部分的に酸化鉄がみられ、下面は黄色砂質土に漸移する。層厚は最広部が30cm、最狭部が8cmで下面は起状を描き、東壁面は途絶える嵌入層。4層は微砂粒から5mmの大砂上で黄色を呈し、下面に人頭大の円錐石塊が露頭する。

3. 出 土 遺 物

b区の耕作上層から1点の弥生土器が出土した（第27図土器実測図）。このことは至近に遺跡が存在することを暗示させる。

弥生後期の頭部の破片（第27図）。八の字形に上向し、端部は外反のきざしがみられる。胴上半部から次第に肥厚し、内面の背部から極端に立ち上り薄くなる。外面に櫛状工具による斜向の刺突列点文を肩部に施し、色調は橙褐色を呈す。内面は頭部以下鋸削りし、2mmから3mmの砂粒を多く含み、焼成は良好。

（渡辺 友千代）



第27図 早苗口頭地点出土土器実測図

第11章 小深上ノ切調査地点

1. はじめに

小深上ノ切地点は、匹見町大字紙祖の元組に所在する。本地点の北西面は緩傾斜地となって下り、その端部は紙祖川が北東流している。また背後は標高848mを測る童仙山の山裾がせまり、その背斜を県道匹見六日市線が走り、それに沿って並村が形成されている立地に位置する。

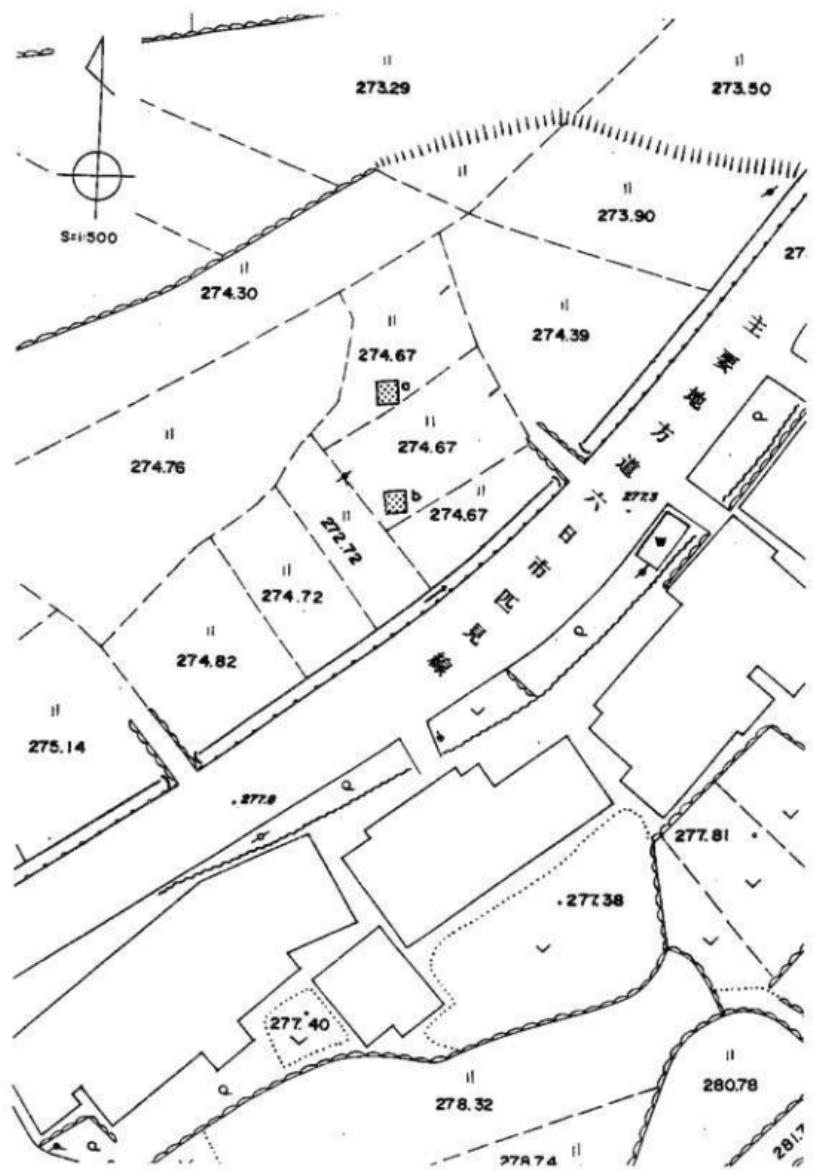
調査は稻の刈取りを終えた後、昭和63年10月13日から63年10月15日の3日間を費やし、2m×2mの調査区の2坑として行ったが、遺構・遺物とも出土しなかった。

2. 調査区の概要

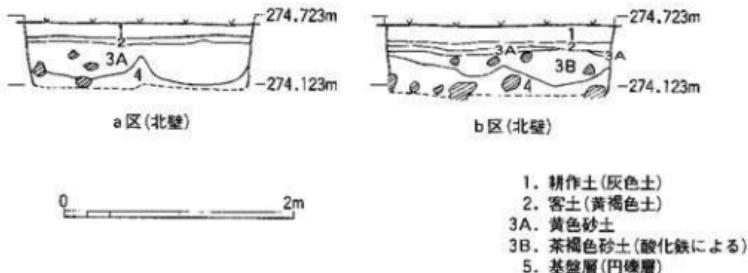
調査区は、比較的平坦面を形成する3画の畦で仕切られた約330m²の水田地を選定した。まず任意に北西側（紙祖川寄り）にa区と称する2m×2mの方形区を磁北に設定。さらに南側（県道寄り）に8m隔ててb区と称する2m×2mの調査区を設けた（第28図）。したがって調査面積は計8m²となり、その現地表面標高は約274.67mであった。

a区 1層は灰色の粘質性耕作土で、層厚は9cmから11cmで薄く、ほぼ水平。2層は黄褐色の砂質土で、5mm余りの砂粒を含む。3層は多量の砂礫を含んだ黄色砂土で、10cm～15cmの円礫も若干混入する。層厚は最広部36cm・最狭部13cmを測り、乱線を描く。4層は円礫の基盤層。拳大から人頭大の円礫が中心で、砂礫を含む。

b区（第29図） 1層は粘質性の灰色土（耕作土）。層厚は17cmから18cmあって、a区に比べて厚い。2層の客土は、黄褐色を呈し若干砂粒を含む。3層は礫を含む黄色砂土で、北壁を見るかぎり約4cm、あるいは尖滅部分などあって薄いが、他の壁では若干の厚み（最広部で約10cm）がみられる。また、その直下には茶褐色の砂土がある（3B層）。実質的には3層と同一層としてみるべきものかも知れないが、酸化鉄が浸沈していることから色調によって細分した。本層は西壁面が4



第28図 小深上ノ切地点配置図



cmと薄く、東壁に向って一部上昇があるものの、総じて東壁面寄に陥入し、半分の疊を含み、若干粘質を帯びる。

本調査区の土質は、全体に耕作土の下の層は河道的様相を示している。これは下位域を流下している紙祖川の影響とみるよりは、本地点の至近（150m）の山稜を刻んで流下する小谷に成因するものと考えられる。

（渡辺 友千代）

第12章 石ヶ坪調査地点

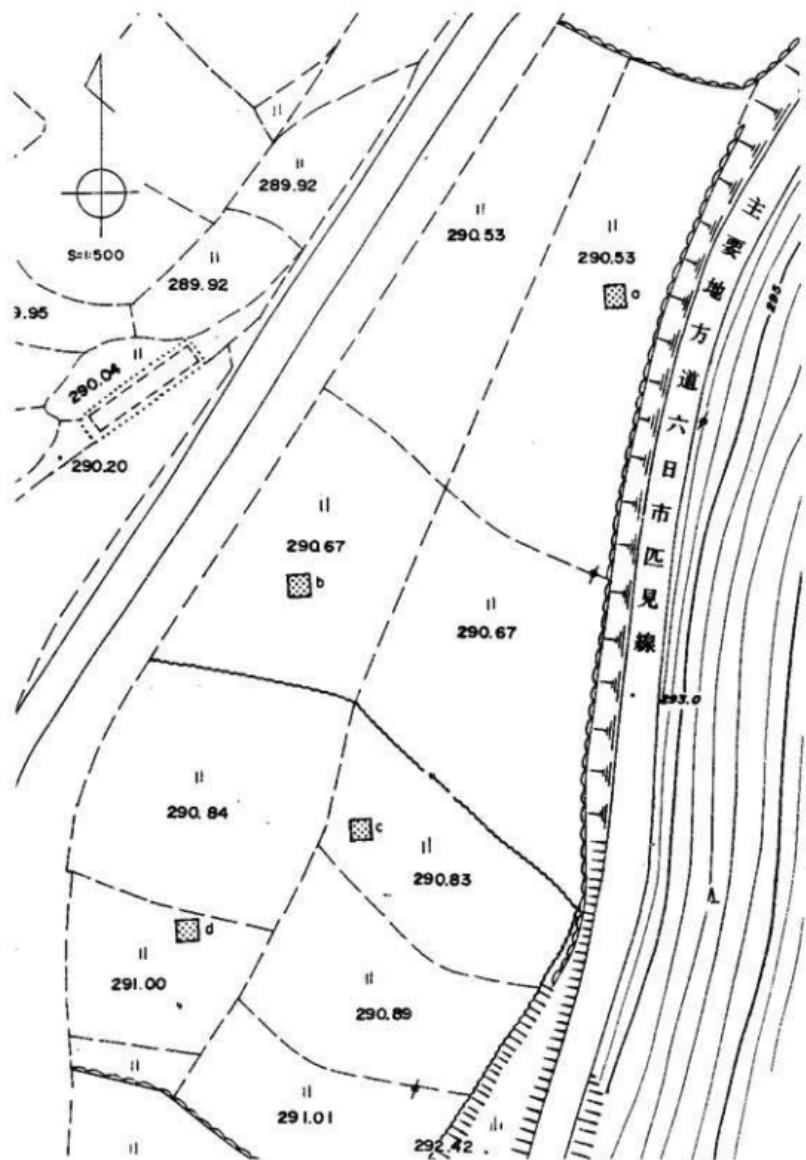
1. はじめに

石ヶ坪地点は、匹見町大字紙祖の元組に所在する。その地点は、断層谷に形成された河岸段丘上で、南西約300m地点を紙祖川とその支流小原川とが合流する。また南東は標高約848m測る童仙山の山麓がせまり、北西面は河岸段丘を形成する紙祖川が比高約6mを測って周流している。北東側は、紙祖河に沿う段丘面がつづくという三角状を成す平坦面に立地している（第30図石ヶ坪地点配置図）。

本地点は、昭和58年の農道施工時に確認されたもので、周知の遺跡であり、今回は範囲確認を主目的に調査したものである。なお調査面積は2m×2mの方形区を4坑として、計16m²であって、昭和63年11月7日から昭和63年11月10日までの4日間を費やして行った。

2. 調査の概要

調査は約2,000m²の範囲を対象地として捉えた。その対象地は水田地で、南西端は現地表面標高約



第30図 石ヶ坪地点配置図

291mを測り、北東端は約290.53mあり、約50cmの高低差がある。調査地点は、まず下流方向の山裾沿いの南西端に、任意に2m×2mの方形区を磁北に設定した。これをa区と称し、そして南に24m測った地点から直角に振り、28m付近をb区とした。さらに調査対象地内の遺物散布の状況を把握するために直角(南側)に20m行き、そこから4m東に行った地点に2mの方形区を設定してc区とした。そしてd区として設定した調査区は、c区地点から4m西側に隔てた地点から、b区地点の南軸に沿ってさらに8m行き、そして西に直角に振り10m測った地点に2mの方形区を磁北に設けたものである。したがって調査箇所は4箇所となり、調査面積は16m²である。また調査地点をジグザグ(稻妻形)した頂部に設けたのは、2,000m²に及ぶ調査対象が曲地であったことと、効率よく遺跡の範囲を捉えようとしたためであった。

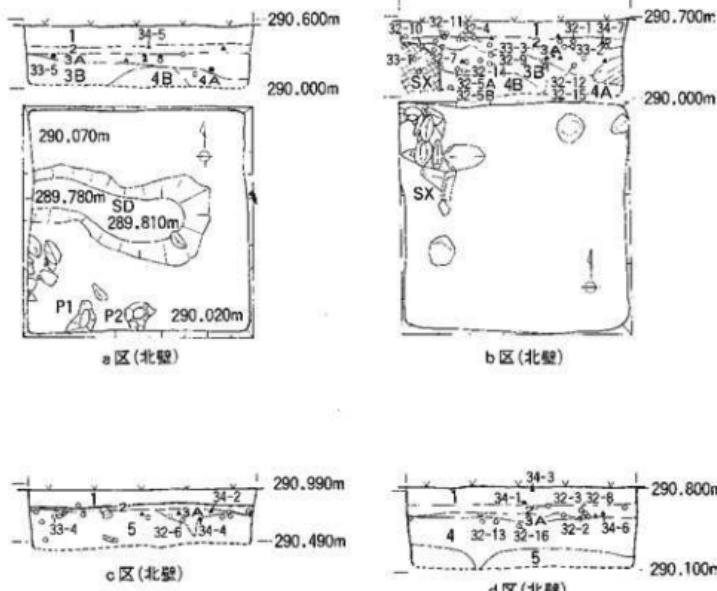
3. 調査区の概要

層位はおおむね6層から成り、文化層は黒褐色土・暗褐色土の3層に集中する。本層からは縄文土器や石器が多数出土し、また地山と想定される4層上面には、土壤や集石遺構が検出された。また6層は円礫層で基底礫を形成している。

a区 (第31図石ヶ坪地点土層断面図・平面図) 現地表面標高は約290.4m。1層は黒灰色の耕作土。層厚は15cmから18cmあり、ほぼ水平。2層は黄灰色した客土で、5mm余りの石粒を含む。2点のガラス質安山岩の剥片が出土する。3層は砂質性の黒褐色土。東壁面は層厚約24cmあり、西壁に向って次第に上昇し、西壁付近で尖滅する。しかし西壁面の下位には暗褐色土に漸移する層が存在する。4層は黄褐色の砂土で、酸化鉄が浸沈する部分は茶褐色を呈し、その嵌入は東壁寄りに偏在し、1点の縄文土器が出土する。また下面の標高約290m、表面地表から約60cm下に暗褐色土の溝状土壤と、ピット2箇所が検出された。その溝状土壤は西壁面から認められ、中央部で深淵状に止る。その最長径約1.6mあり、溝高部の最大幅約80cm、溝低部は約38cmあって、最深部は約19cmを測る。ピット1、ピット2は地表面から58cm下の標高約290.02cmに検出された。ピット1は梢円形で最大径16cm、ピット2は円形で約10cmを測り、壁面はいずれもUの字形を呈し貧弱。また西壁に偏在する集石は、高低差があり、しかも砂礫層に露頭したものであるため、流石群と思われる。

b区 (第31図石ヶ坪地点土層断面図・平面図) b区は調査対象地のはば中央で、西面寄り(紙祖川面)。表面標高は約290.67m。

1層は黒灰色の耕作土。層厚は約14cmありほぼ水平で、3点の縄文土器が出土している。2層は石粒を多く含む客土で、黄灰色を呈し、やや砂質性。層厚は平均約7cmあって、客土にしては厚いので、局部的な低地によつたためと思われる。したがって、他の壁面、特に南壁などは約4cmと薄い。縄文土器、石器剥片が出土する。3層は砂質性の暗褐色土。中央部分から東壁に向って酸化鉄



- 1. 耕作土(黒灰色土)
 - 2. 寄土(黄灰色土)
 - 3A. 茶褐色土(酸化鉄による)
 - 3B. 暗褐色土
 - 4. 黄色砂土
 - 4A. 淡茶褐色砂土(酸化鉄による)
 - 4B. 黄褐色砂土
 - 5. 黄色砂砾層
 - 6. 円砾層
 - 縄文土器
 - ▲ 石器
 - 陶磁器
- 0 2m

第31図 石ヶ坪地点土層断面図・平面図

による茶褐色を呈した屑が陥入する。本層からは縄文土器・石器が出土し、特に北西面の集石遺構部(SX)に集中している。その集石の大半は円砾で組成されており、中には擦痕をもつ台石と想定されるものがある。4層は砂土で、黄褐色を呈し、酸化鉄が浸沈する部分は淡茶褐色を呈している。出土物はない。

c 区 (第31図石ヶ坪地点土層断面図・平面図) c 区は調査対象地の南側で、地表標高は約290.83m。1層の耕作土は黒灰色を呈し、14cmから16cmありほぼ水平。1点の縄文土器が出土。2層は石粒を含んだ黄灰色土で、層厚は1cmから4cmを測り、2点の縄文土器・1点の石器剝片が出土。3層は下位の黄色砂疊層に嵌入する砂土層。酸化鉄を含んでるので、茶褐色を呈す。2点の縄文土器と2点の石器剝片が出土している。4層 (第31図には5と表示した) は5mmから1cm余りの石粒、拳大の礫を含む砂疊層で、河道と想定される層。本層から傷損・風化した縄文土器8点、石器剝片1点が出土。

d 区 (第31図石ヶ坪地点土層断面図・平面図) 調査対象地の南西側に設定した調査区で、表面標高は約291m。1層は耕作土で平均16cmではほぼ水平である。2層は石粒を含む黄灰色の客土。直下に酸化鉄の浸沈があるため、正確に層厚は把握が難しいが、約5cmから9cmあってぶ厚い(誤認があるかも知れない)。縄文土器が数点出土する。3層は砂質性で、酸化鉄が浸沈しているため茶褐色を呈している。層厚は中央部約8cm、両端にかけて次第に上昇しながら減滅する。4層は砂粒の砂土。上面は部分的 (3層直下) に淡茶色を呈しているが、下面に向って漸移的に黄色になる。層厚は1箇所に自然的と思われる陥ち込みが認められるが、約30cmあって、ほぼ水平に堆積する。上面に数点の縄文土器と1点の剝片石器が出土。5層は石粒・拳大の砂疊層。出土物はない。

本地点の層序は大方6層に分層できる。つまり耕作土・客土・暗褐色土・黄色砂土・砂疊層・円礫層となる。そのうち出土層においては疎密が認められるものの、その中心は3層の暗褐色土である。その直下層にa区調査区 (3層において2点の陶器の出土から不安定さがのこる)・b区調査区のうち、特にb区調査区での集石遺構は注意されるものと思われる。

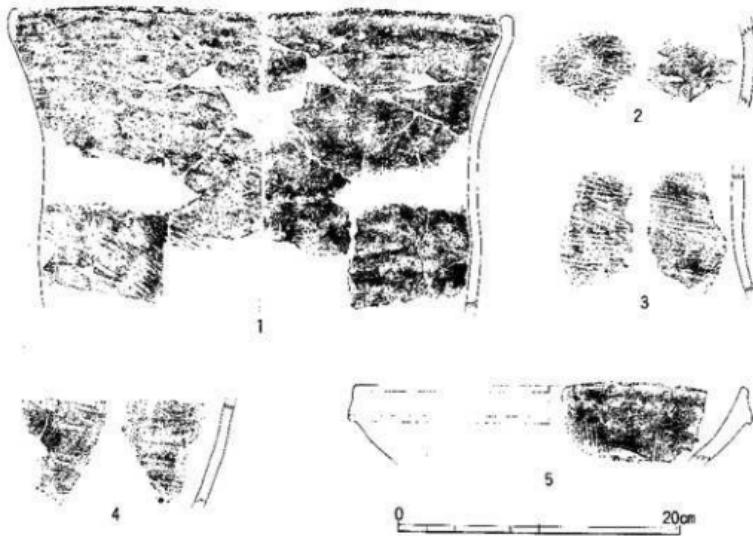
4. 出 土 遺 物

本地点では縄文土器62点、石器 (剝片を含めて) 24点、陶器2点の計88点が出土した (近接し同体とみなされたものは一括に採り上げたので実数は若干多くなる)。

縄文土器 (第32図上巻実測拓本図(1)) (第33図下巻実測拓本図(2)) 32-1は凹線を施した凸部分で、曲凹状を描く。円線部分に竈状施文具による傷痕がみえる。また胎土に滑石が混入され、梗灰色を呈す。32-3は棒状施文具によって直角状の沈線を描き、器面は鏡磨きする。胎土に2mm余りの砂粒を含み、淡橙色を呈し、焼成は良好である。32-4は浅鉢系の波状口縁部。施文は棒状施文具による太い沈線。口径約28cmで、内外とも丁寧に鏡磨きし、外面には煤が付着する。胎土に5mm余りの砂粒を含み梗灰色を呈す。5Aは、3層下位に出土した浅鉢系の口縁部。口径約15cmで、Vの字形に立ち上がり、口唇端は内側に内向する。外面は棒状施文具による沈線を施し、内外を鏡磨きする。焼成は良好で、胎土は黄灰色を呈すが、内外面に煤が付着する。中津系のものと思わ



第32図 石ヶ坪地点出土土器実測拓本図(1)



第33図 石ヶ坪地点出土土器実測拓本図(2)

れる。32-6は口縁部。口縁端を内外から指頭で押圧し、器面をナデ調整した後、浅い沈線を描く。色調は茶灰色を呈し、胎上に滑石を混入する。32-9は胴部屈曲部片で、内外を条痕で乱調ぎみに施文する。内面は煤が付着し、胎上はきめ細かく黄灰色を呈す。32-11は外面を貝殻腹縁によって押引したもので、沈線を施す。内外にベンガラで彩色したもの。32-14は浅鉢系十器。外面に曲線文を施文し、部分的に構文を配置する。中津系のものと思われる。内外とも笠磨きするが、内面は撫で仕上げ。33-1は粗製の深鉢土器。口径は約35cmあり、胴上半部から肩部にかけてゆるやかに内傾し、頸部でゆるやかに外傾して口縁部に至る。口縁部は平口縁で、端部は円味をもちやや内湾する。外面は不規則に条痕で施文し、上半に煤が付着する。内面は笠調整の後撫で仕上げする。胎上に5mm程度の砂粒を含み、色調は橙灰色を呈し、焼成は良好である。33-4は胴下半部で、内外を板状施文具で調整したものの。33-5はa区の3層直出土した擂鉢。口縁部は外面に突帯状のものをそなえ、文様はなく撫で仕上げ。色調は突帯部(口唇部の内面)が灰色で、その下部は黄褐色を呈しており、焼成はきわめて良好。備前系のものと思われる。

石器 (第34図・図版18-2) 34-1は損欠した磨製石斧で、石材は疑灰岩。34-2・34-3は安山岩質の打製石斧。外面はいずれも灰色に風化する。34-4・34-5は明瞭な2次加工がみられないため、製作過程に係る石器剝片と思われる。いずれも安山岩質であるが、34-5は黒っぽく

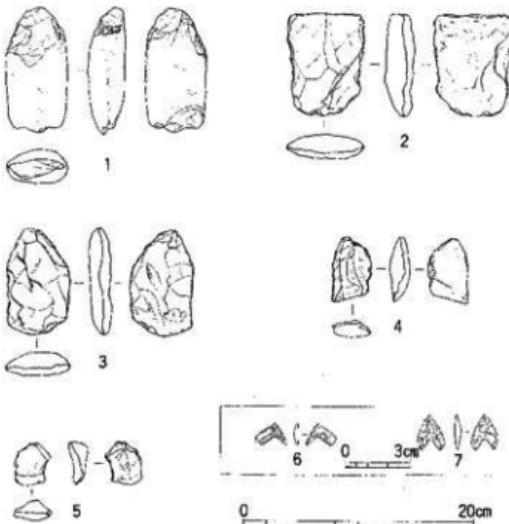
ガラス質である。34-6・34-7は無葉の石鏃で、石材は34-6が乳白色の黒曜石、34-7はガラス質安山岩。34-6は脚部の一方が欠損し、基部は大きく開いている。34-7は二等辺二角形を呈している。

今回の調査では、調査面積が小規模であったにもかかわらず、ある一定の成果を取れることができた。つまり、a区の溝状遺構（第31図）、特にb区の横石遺構の検出は、遺物の山上と相俟って住居遺構が存在することを暗示させ、また、中津系（3, 4, 5Δ, 11, 14）福出K系

（道ワテ尻地点に搬移した土中

に確認されている）あるいは阿高系（1, 2, 6, 10）などが確認されたことである。ただしこれらの型式系統が、層序的あるいは供伴的な面からどのように位置付けられるべきかは、細小面積の調査であったことに加えて、上層の人为的擾乱などから把握できていない。これらの問題については、平成元年度の本格調査の結果に委ねなければならない。

（渡辺 友千代）

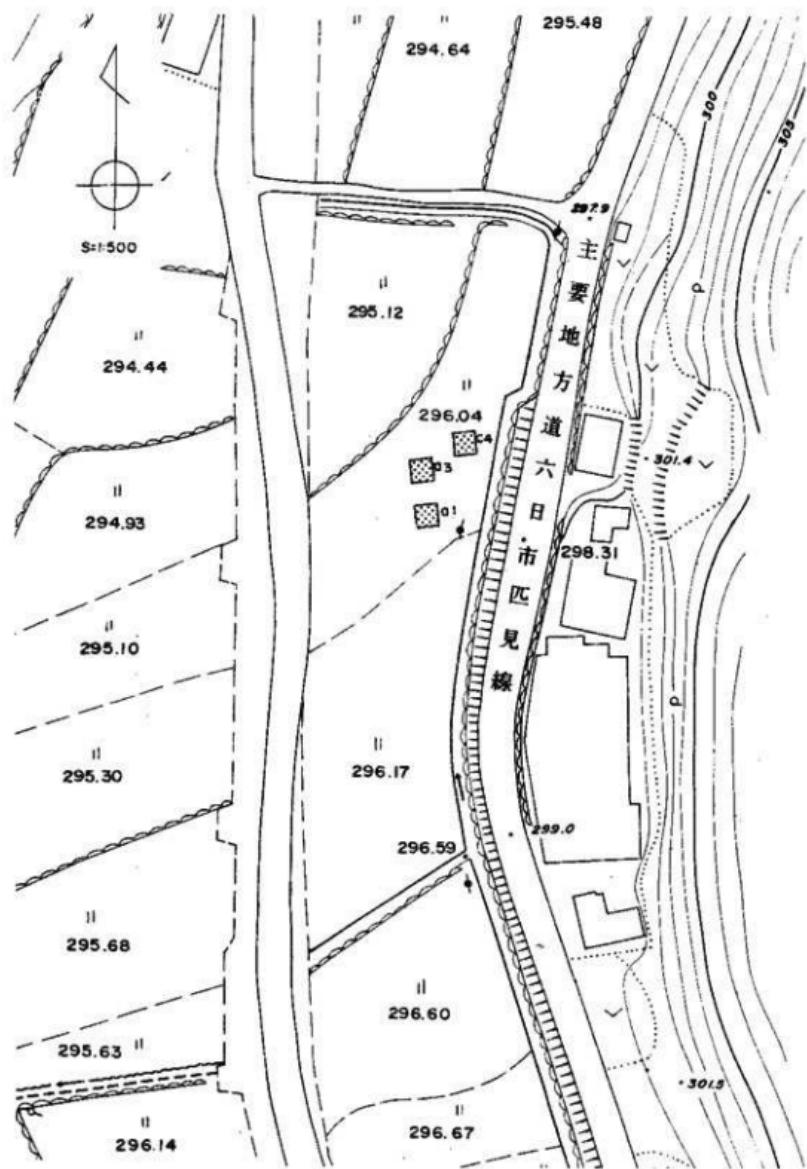


第34図 石ヶ坪地点出土石器実測図

第13章 道ワテ尻調査地点

1. はじめに

道ワテ尻地点は四見町人字紙祖の元組に所在する（第35図道ワテ尻地点配置図）。その地点は顯著な断層谷の断点にあたり、紙祖川とその支流である小原川が合流する位置にある。その域は南東に童仙山（848m）がせまり、北西には紙祖川を挟んで要害山がひかえ、また北東側は紙祖川が形成した狭長な河岸段丘が拓けた標高約296.04mの紙祖川の右岸に立地する。



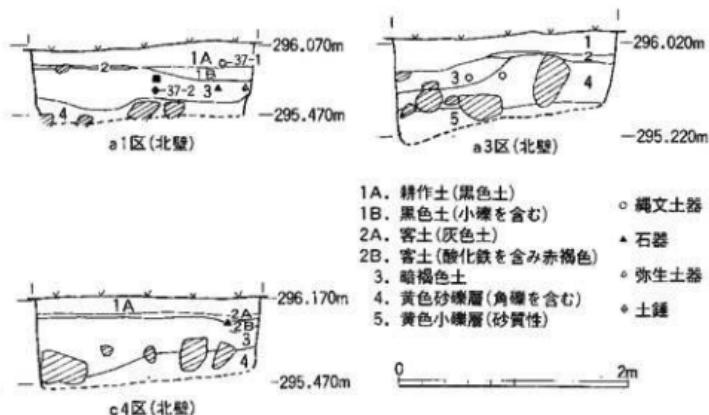
第35図 道ワテ尻地点配置図

また本地点からは数点の土器をはじめ、土錐・土掘具や石器片などが出土したが、層序的に搅乱されたり土壤搬入等によって、位置付けは無理な状況下にあった。なお調査は昭和63年6月10日から昭和63年6月15日まで行い、そのうち4日間費した。

2. 調査の概要

調査は、休耕田として畠地に転用されていた地名「道ワテ尻」と称される約240m²を調査対象地とした。

まず南端に任意に基準点を中心に、2m×2mの方形区を磁北に設定した。そして遺跡の可能性は竜仙山に沿う北東側とみられたので、その基準区をa1とし、磁北方向縦軸に2m毎に1, 2, 3…の数字として現した。また主軸から東側横軸は2m毎にa, b, c…のアルファベットで表すこととした。つまり、a1区から磁北方向2m地点のものをa3区と称し、さらに東に2m振り、その地点から2m×2mの方形区を設定したものc4と区名した。したがって調査面積は3杭の12m²であった。



第36図 道ワテ尻地点土層断面図

3. 調査区の概要

a1区 (第36図道ワテ尻地点土層断面図) 1層は黒色の耕作土。東壁面(山裾)側が標高約

5 cm高く、層厚は約22cmで厚いが、西壁面（紙祖川）側は約13cmで薄い。また北壁中央部から東壁に向って、耕作土層をさらに細分できる角縁の小碟を多数含む黒色土が嵌入する。これらの層序関係は、昭和58年の追土による嵌入が行われたという事実から生じたものと想定される。したがって1層の耕作土から出土した1点の磨消縄文は、原土地の遺跡に伴うものであろう。それは前章で述べた「石ヶ坪地点」のものであると想定できよう。2層は小碟を含む灰色した客土。北壁でみると中央部から西壁に向って層厚1cmから2cmをもって至っているが、東壁方向は中絶している。3層は暗褐色土。層厚は約20cmから30cmと高低差を計るが、これは山裾の立地によるものと思われる。本層からは陶磁器・石器・土縫の各1点ずつと、弥生土器と思われる小片1点が出土している。しかし1層の耕作土が3層以下まで嵌入している状況からみると、それらの所産は前述の成因によって生じたのかも知れない。それは陶磁器の供伴、またそれらの遺物が、1層の嵌入層寄りに出上したことによって把握できる。このような状況はa3地区でも認められる。4層は上層面に角縁を多く含む黄色砂碟層であるが、下面は円碟が露頭する。

a3区（第36図道ワテ尻地点土層断面図） 1層は黒色を呈した耕作土。層厚は東壁面側が約20cmあって、中央部はやや薄く約14cm、そして西壁面に向って陥入し最広部は約30cmを計る。2層は砂粒を含んだ灰色の客土。層厚は2cmから7cmを計るが、中央部から東壁のみ残存し、部分的に搅乱されたことが確認できる。3層は暗褐色土で、拳大の角縁を含み、層厚は平均約15cm測って西壁面に偏在する。縄文土器1点が出土。4層は黄色砂碟層で、上面に角縁を含むものの下面は人頭大から50cm余りの円碟が多数ある。上面の3層との接境に織文土器が1点出土する。5層は砂性の小碟層で西壁面（紙祖川）に向って次第に低くなる。

c4区（第36図道ワテ尻地点土層断面図） 1層は耕作土で黒色を呈す。層厚は約13cmあってほぼ水平。2層は砂粒を含んだ灰色土で、層厚は2cmから5cmあり、ほぼ水平に残存するが、東壁面に小碟を含んだ酸化鉄部分が確認され、安山岩質の石器剝片1点が出土する。3層は砂質性の暗



第37図 道ワテ尻地点出土土器実測拓本図

褐色土。層厚は約15cmから約50cmあって、西壁面へ向って次第に低くなる。人頭大の角礫を含む。4層は上面に角礫、下面に人頭大から40cm余りの円礫を含んだ砂礫層。本地点の層序は、a1区、a3区をみるとかぎり、上位層において搅乱的序列を見い出すことができる。それは河岸段丘の端部であり、しかも山裾であるという立地性によるものと想定される。しかも造田時もこれに加わり、また追上の収入などの人為によって、遺跡の性格を描き出すことを一層困難にしているといえる。

4. 出 土 遺 物

本地点では繩文土器3点、石器および剝片2点、弥生土器と思われるもの1点、土錘1点、陶磁器1点の計8点が出土した（第37図十器実測拓本図）。

37-1は耕作土から出土した福IIKⅡ系の土器。浅鉢系の口縁部で、V形状を呈し口縁端を若干肥厚させる。外面に3本の曲線の沈線を施し、その間を繩文で飾る。器面は内外とも磨き、焼成をきわめて良好である。37-2は土錘。端部は瓶の肩部状を成し、胎土はきめ細かい。焼成はきわめて良好で、淡赤褐色を呈す。

（渡辺 友千代）

第14章 小 結

昭和63年度の国庫補助事業として行われた「町内遺跡詳細分布調査」では、11地点（発掘面積約132m²）のうち6地点（1地点は耕作土中で出土）で遺物あるいは遺構（2地点）の検出が確認された。以下、検出地点を中心に若干のコメントを述べ小結としたい。

前田地点では土師器を中心に、繩文土器、石器、石器剝片等の遺物が確認されたが、その出土の仕方には層位的に曖昧さが残った。それは下位層に陶磁器が出土し、その上位層には石器が出土するという一部に逆転がみられたことである。これは本遺跡が低澤という地形的立地により、流入遺物であったということで層位的にも捉えることができる。しかし数点の偏平状の打製石斧の出土のうち、器幅、厚さとも同形にもかかわらず、刃部は弧刃状につくり出しが成された形状は特に注意されるものであった。また打製石斧の出土の点数においては、前III尻地点でも狭小面積にもかかわらず、7点（折損も含めて）が確認されており、そのうち1寧に調整された大ぶりの短冊形のものも層位的に系統付ければ注意されるべき遺物であったといふことができるであろう。

その前田尻地点では、繩文後晩期と想定される5層直下から配石をもった75cm×50cmの土括的陥込が確認され、また行ヶ坪地点では溝状遺構、積石遺構などが検出されたことは意義深いものであったといえる。ただし具体的な位置付けとなると、狭小範囲の発掘面積からは浮び上ってはこな

かたのが実状である。しかし該2地点では遺物包含層がある集密性をもって特定できること、またその包含層が良好に遺されていることなどから優良な遺跡であることはいうまでもないといえる。

そうした遺構の検出を可能にしたのは比較的平坦面を形成している河岸段丘上であったからである。その河岸段丘上では現在でも水田耕作がつづけられていてひとつの生活域を成している。一方ではその水田域がペールのような役目を果し貴重な遺跡を遺したともいえそうである。立地の上からみれば、正に前述の前田尻地点、石ヶ坪地点は古代人にとって格好な場であったといえる。殊に石ヶ坪地点は狭長な河岸段丘端にあって、二つの川の合流地、背後は2断層の分岐点がひかえるという1つの“文化の出入口”的な立地様相を呈しているのである。

その石ヶ坪地点では縄文後期前半から後期後半に批准される磨消繩文を中心としたものと、滑石混入器である四線文の阿高式系ものが数点出土している。これらの阿高式系のものと、一定の幅を持った磨消繩文系がどういう関わり、あるいは独立性をもっていたものかは乏しい資料からは断定できない。しかし層位的に遺物の粗密性がはっきりしている点は、遺構との近接性を物語るものとして今後の調査で期待されるだろう。そういったまとまりをもった出土の仕方は荒木地区の下正ノ田地点でも3層で確認されたが、泥炭層という層状が資料価値を弱めたことは残念であった。しかし多くの十師器・須恵器が出土した下正ノ田地点は、豊富な資料を提供してくれたのは確かである。その出土遺物には、他に下位層から出土した弥生土器・繩文土器また上掘具・砥石・石器剝片・木器・陶磁器等約250点余りの幅をもった複合遺物が出土している。そのうち繩文土器は条痕地の黒土A・B式のもの、弥生土器は後期に比定されるものであった。最も多く出土した十師器は須恵器第3期³¹に批准されるものが多く、須恵器は蓋坏などからみる限り、Ⅳ期、それ以降のものを多とされている。苦止町地点でも、下正ノ田地点と同時期と想定される十師器・須恵器が出土しているが、その大半が上位層に出土しているため、層位的に資料価値を弱めていることは残念であった。また道ワテ尻地点は土壤の搬入や搅乱の層序で、遺跡と捉えがたいものであった。

圃場整備事業に伴って急に実施された今回の分布調査は、殊に休耕田・転作用地を対象に行われた調査にしては大きな成果があったと思われる。しかし狭小面積での調査のため、具体像を浮き彫りにすることは今一つであった。今後、実施されるであろう本格調査にその期待を委ねなければならないであろう。

(渡辺 友千代)

◇注1 山本 清 「山陰古墳文化の研究」

◇注2 山本 清 「山陰古墳文化の研究」



紙祖地域遠望(北西から)



荒木地区全景(東から)

図版 2



1. 上ノ田地点全景(南西から)



2. 上ノ田地点 a 区土層



1. 前田地点遠景(南東から)

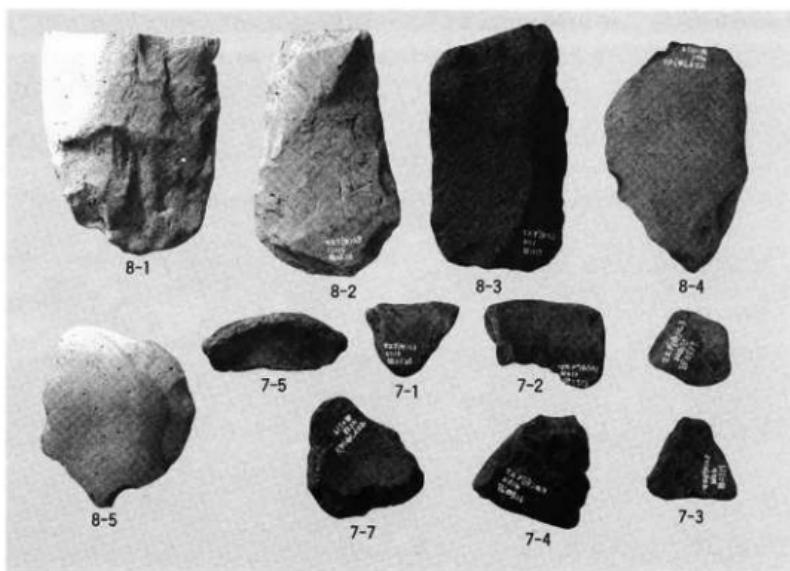


2. 前田地点 b 3区北壁土層

圖版 4



1. 打製石斧出土狀況(前田地點)



2. 前田地點出土遺物



1. 前田道ノ下地点遠景(南西から)



2. 前田道ノ下地点 a 区北壁土層

図版 6



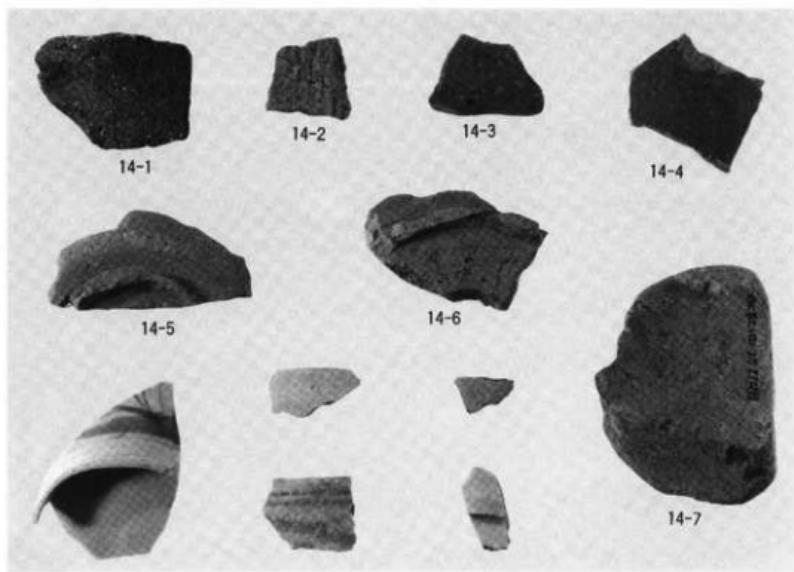
1. 善正町地点 q 6 北壁土層



2. 善正町地点 k 1区北壁土層



1. 善正町地点 k 6 区東壁土層



2. 善正町地点出土遺物



1. 曾利田地点遠景(東から)



2. 曾利田地点東壁土層



1. 前田尻地点全景(西から)

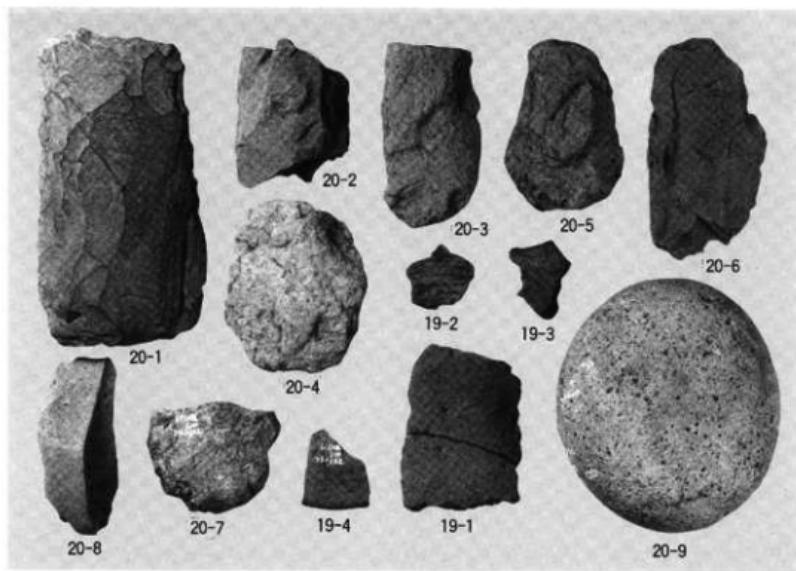


2. 前田尻地点 a 区北壁土層

图版10



1. 前田尻地点 b 1区北壁土層



2. 前田尻地点出土遺物



1. 下正ノ田地点遠景(南から)

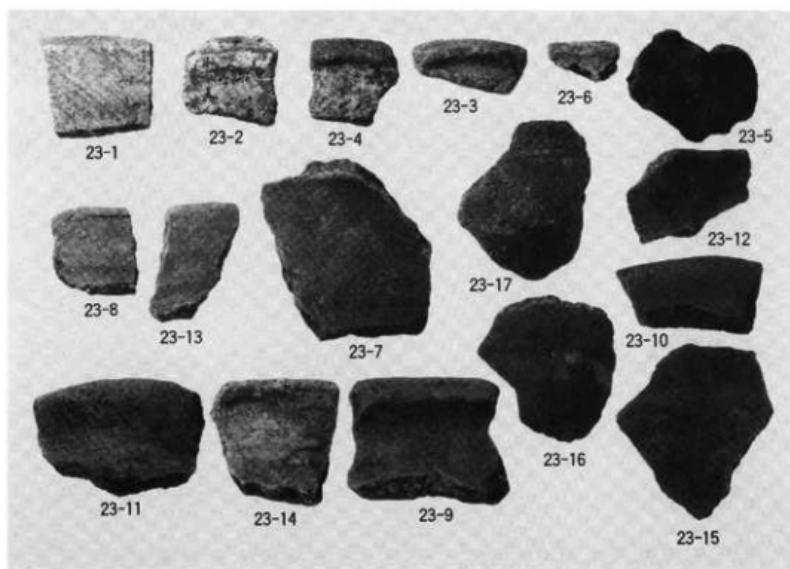


2. 下正ノ田地点南壁土層

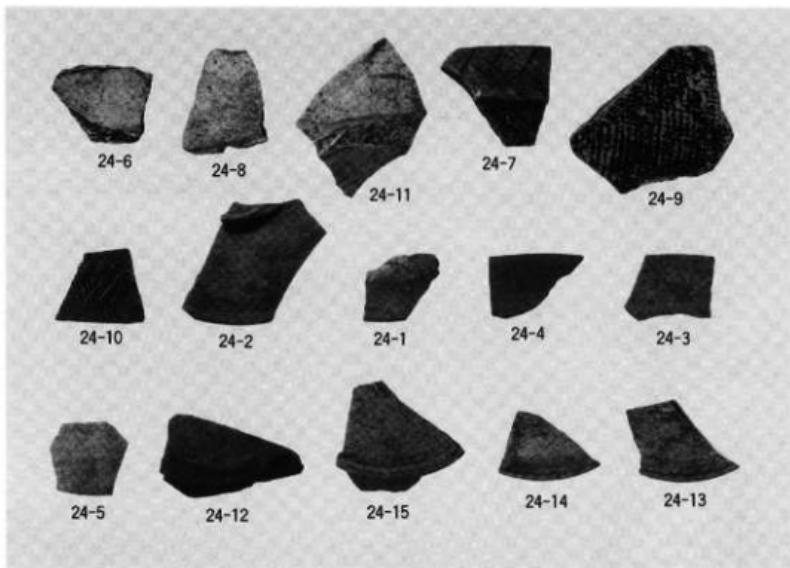
図版12



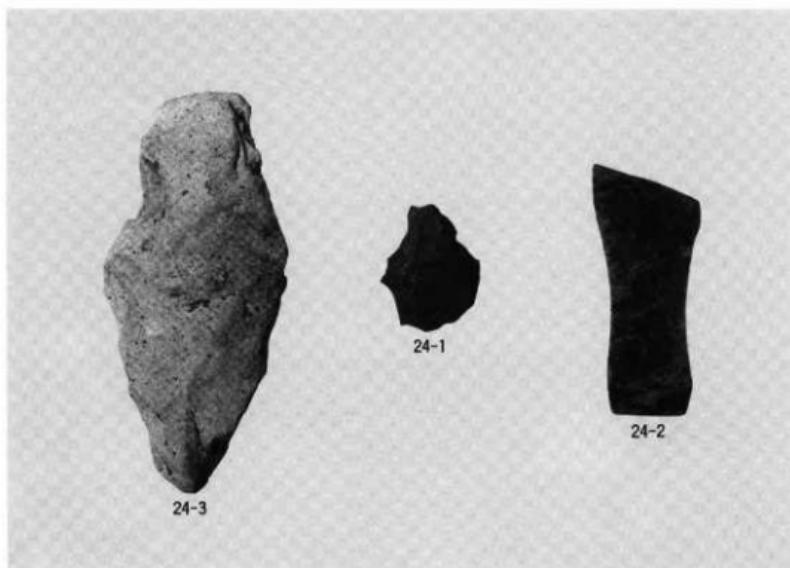
1. 下正ノ田地点 a 4区東壁土層



2. 下正ノ田地点出土遺物



1. 下正ノ田地点出土遺物



2. 下正ノ田地点出土遺物

図版14



1. 早苗口頭地点遠景(東から)



2. 早苗口頭地点 b 区北壁土層



1. 小深上ノ切地点遠景(西から)



2. 小深上ノ切地点 b 区北壁土層



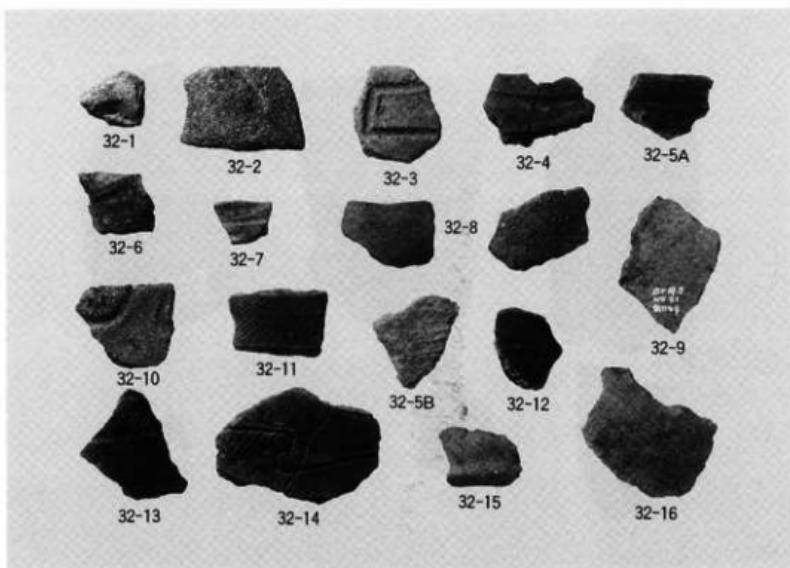
1. 石ヶ坪地点遠景(北から)



2. 石ヶ坪地点b区北壁土層

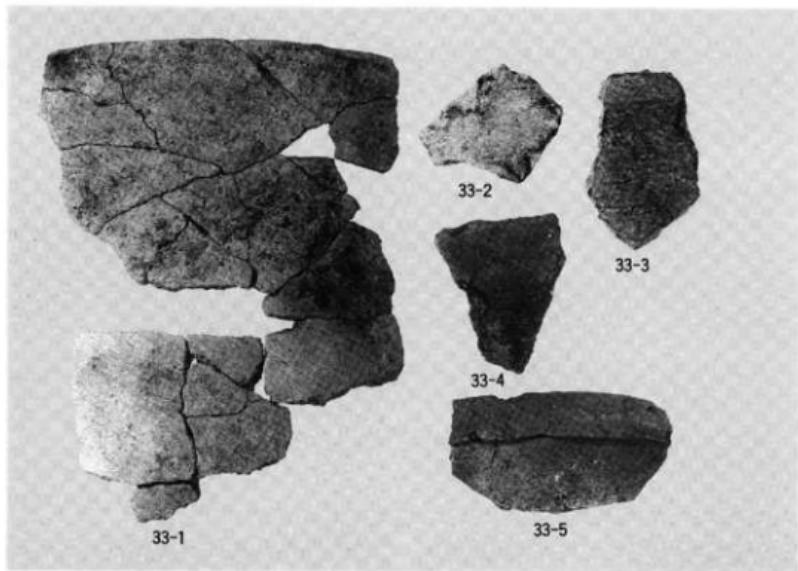


1. 石ヶ坪地点 c 区北壁土層

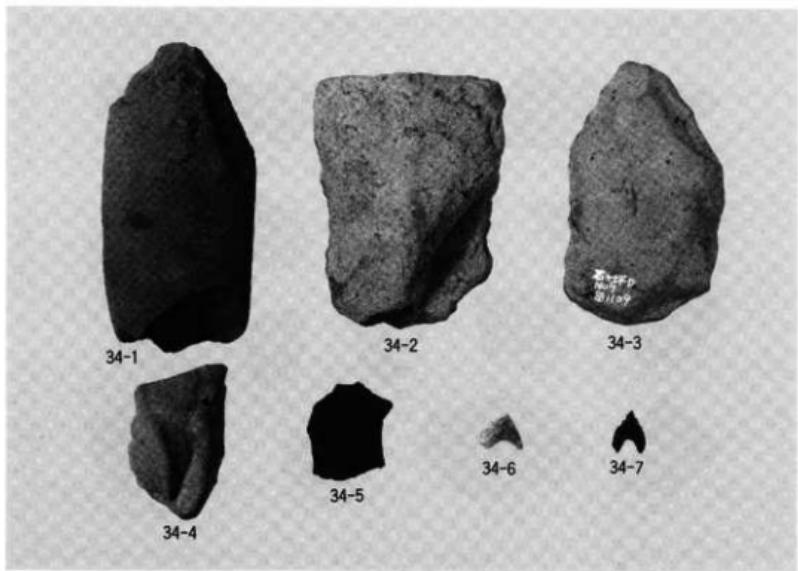


2. 石ヶ坪地点出土遺物

図版18



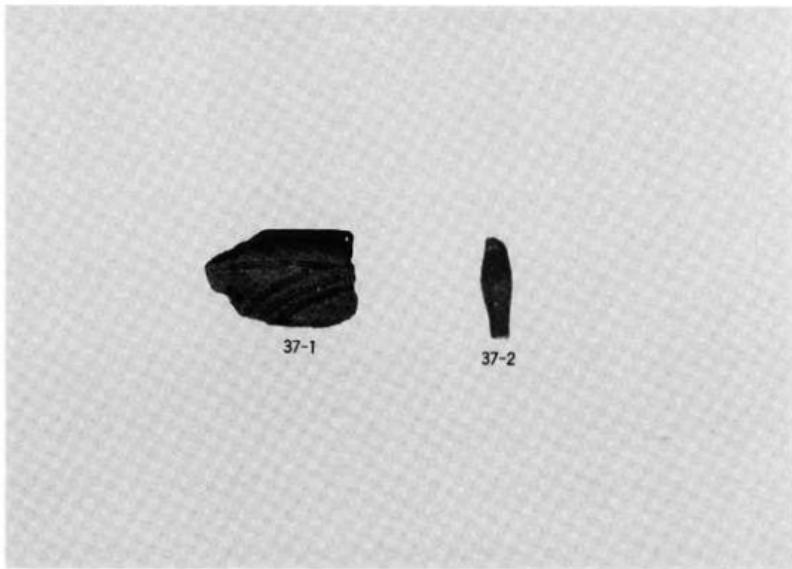
1. 石ヶ坪地点出土遺物



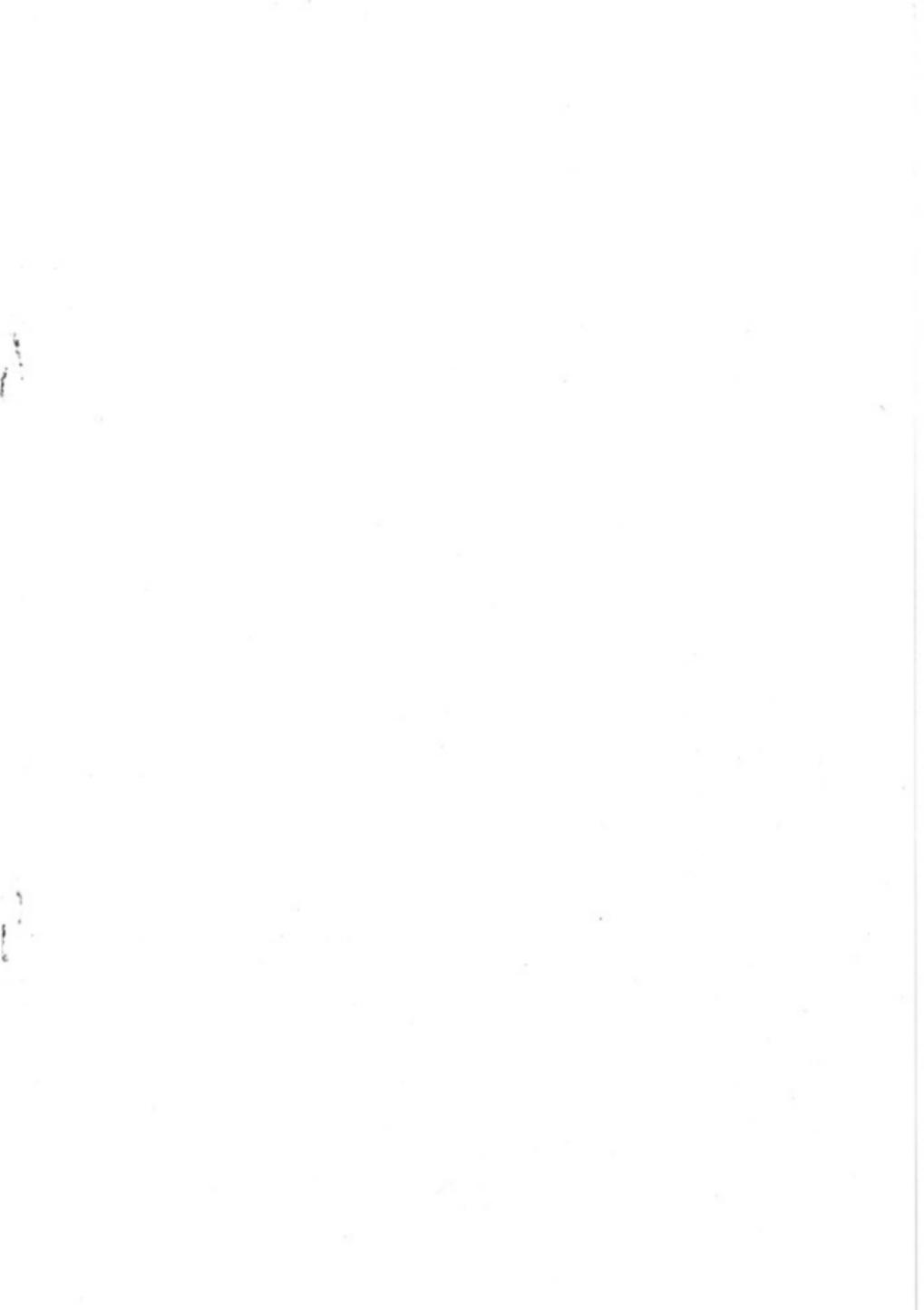
2. 石ヶ坪地点出土遺物



1. 道ワテ尻地点遠景(東から)



2. 道ワテ尻地点出土遺物



平成元年3月20日印刷
平成元年3月31日発行

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ

発行 匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町41260
印刷 有限会社 谷口印刷
島根県松江市母衣町89
